



Borderless Area Omihachiman Art Festival

ボーダレス・エリア近江八幡芸術祭

# ちかくのまち

“Town of Perception”

“ボーダレス・エリア近江八幡”をみんなで作るプロジェクト  
ドキュメントブック

Project report of making together “Borderless Area Omihachiman”





“ボーダレス・エリア近江八幡”をみんなで作るプロジェクト  
ドキュメントブック

Project report of making together “Borderless Area Omihachiman”

Borderless Area Omihachiman Art Festival

ボーダレス・エリア近江八幡芸術祭

ちかくのまち

“Town of Perception”

## もくじ

はじめに	3
“ ボーダレス・エリア近江八幡 ” をみんなで作るプロジェクトとは	4
<b>アートの驚きを共有する</b>	6
実施内容とねらい	8
全体コンセプト	10
複数会場での展示	12
ボーダレス・アートミュージアムNO - MA	12
奥村家住宅	14
近江八幡市安土 B&G 海洋センター、よしきりの池	16
アーティストによる作品の共同制作	18
来場者アンケート	20
パフォーマンスプログラム	22
パフォーマンスプログラムの概要	22
パフォーマンスと展示 武友義樹×福留麻里	24
コラム ボーダレス・エリア近江八幡アカデミーより	26
百瀬文 プロジェクトの記録	28
寄稿：百瀬文「接触を伴う制作の是非をめぐって」	30
<b>芸術作品や町を楽しむことを当たり前</b>	32
実施内容とねらい	34
鑑賞サポートツール	36
鑑賞サポートツールの作成	36
鑑賞サポートツールができるまで	38
地域へのアクセシビリティの拡充	40
安心して町歩きを楽しむための取り組み	40
バリアフリーメニュー等作成のプロセス	42
地域店舗の声	44
コラム ボーダレス・エリア近江八幡アカデミーより	46
障害のある人と作品を体感する鑑賞会	48
盲ろうの人、視覚障害の人と楽しむ“ランチと芸術鑑賞会”	48
アートをきっかけに いろんな感じ方をシェアしよう!	50
鑑賞会で寄せられたアンケートの考察	52
<b>カルチュラル・デモクラシーの実現に向けて</b>	54
実施内容とねらい	56
エデュケーション・サポーター	58
アートと人の架け橋となる学びの場を企画	58
ちかくのじかん	62
NO - MA 記者クラブ	64
芸術祭や町の魅力を取材して、自身の言葉で発信	64
活動の記録	66
皆さんの記事	68
会場ボランティア	70
人と人、人と作品をつなぎ、地域の魅力を伝える大切な存在	70
活動日誌	72
アンケート	76
サポーター活動報告会	78
ぐるり町歩き会	80
コラム ヒラトモさんとめぐる!ぐるり町歩き会	82
ボーダレス・エリア近江八幡アカデミー	84
ぱったり床几プロジェクト、クラウドファンディング	85
コラム ボーダレスと感染症～コロナ禍でプロジェクトが実施されるまで～	86
<b>終章</b>	88
アール・ブリュット魅力発信事業実行委員会	89
パブリシティ	90
謝辞	91

## はじめに

アール・ブリュット魅力発信事業実行委員会では、これまで障害者の優れた芸術作品を見出し、国内外に発信する「アール・ブリュット魅力発信事業」を、複数年にわたり実施してきました。平成 30 年度からは近江八幡を舞台として、障害の有無に関わらず、誰もが「観る」ことや「創る」ことを楽しみ、有機的に「繋がる」エリアを形成することを目的に、「“ ボーダレス・エリア近江八幡 ” をみんなで作るプロジェクト」を実施してきました。

障害者の創造活動の機会創出と鑑賞アクセシビリティの向上に取り組んだ平成 30 年度、その成果と課題を踏まえ、専門家らと共働して 7 会場で障害特性に応じた周遊型の鑑賞の場を創出した平成 31 年度。3 年目を迎えた今年度は、他領域を横断しながらプロジェクトのコンセプトを共有し、新たな繋がり方を創出することで、町のアイデンティティを形成することを目指しました。

今年度のプロジェクトは、ボーダレス・エリア近江八幡芸術祭「ちかくのまち」が中核となりました。新型コロナウイルス感染防止の観点もあり、近江八幡の旧市街にある 2 会場のほかに、安土エリアに屋外展示の 2 会場を設けました。そこでは多様なアーティストとの共働制作を実施するとともに、デジタル・アートやパフォーマンスプログラムなど魅力的なプログラムを多角的に発信しました。また、誰もが芸術祭を楽しめるように、音声ガイドやわかりやすいメニュー、周辺マップなどを制作しました。さらに、これらのプログラムを、サポーターをはじめとする地域住民や、商店と共働したことも本事業の重要な取り組みとなりました。

本ドキュメントブックは、今年度実施したプログラムの全貌をまとめたものです。3 年目を迎え、明確なねらいを持ち取り組んだプロジェクトの実施内容がまとめられています。

最後になりましたが、本事業の実施にあたり、多大なるご協力をいただきましたすべての皆様に、心からお礼申し上げます。

2021年3月

アール・ブリュット魅力発信事業実行委員会

実行委員長 牛谷正人

## “ボーダレス・エリア近江八幡”を みんなで作るプロジェクトとは

アートを鑑賞することや創作することの楽しさを、地域の方々と共有することを通して、誰もが芸術文化に触れることができる“ボーダレス・エリア近江八幡”を形成するプロジェクトです。このプロジェクトでは、近江八幡という“町”を舞台に、アーティストや地域の方、店舗などが参加して、みんなで作るボーダレス・エリア近江八幡芸術祭「ちかくのまち」を開催しました。

“ボーダレス・エリア近江八幡”を作るにあたり、3つの大きなテーマをプロジェクトの中心に据えました。一つ目は、アートの新たな魅力発信を目指した「アートの驚きを共有する」。二つ目は、アクセシビリティを広げることに取り組んだ「美術作品や町の魅力を味わうことを当たり前」。三つ目は、あらゆる人たちがアートの参画者になる「カルチュラル・デモクラシーの実現に向けて」です。“ボーダレス・エリア近江八幡”では、私たちの感覚を刺激するアートや出来事、出会いが待っています。

### このプロジェクトが実施した取り組み

平成30年度

2018年9月22日～11月25日

以“身”伝心 からだから、はじめてみる

平成31年度

2019年9月21日～11月24日

ボーダレス・エリア近江八幡芸術祭 ちかくのたび

令和2年度

2020年9月19日～11月23日

ボーダレス・エリア近江八幡芸術祭 ちかくのまち

## 実施内容（プロジェクト3つのねらい）

### アートの驚きを共有する

人とアートの接点を見出し、相互理解が深まる場を作ることを目指します。そのために、多様なコラボレーションの形や、地域の方々が作品を紹介する場を作るなど、作品の新たな魅力を発信するプログラムを多角的に実施します。

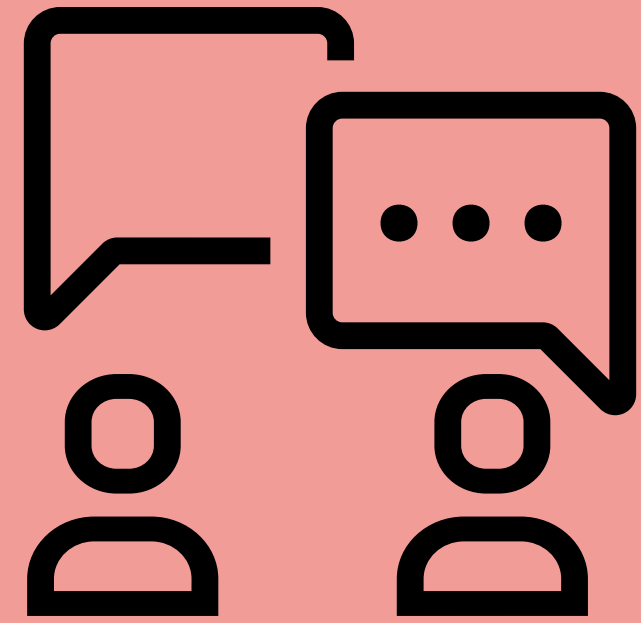
### 美術作品や町の魅力を味わうことを当たり前

地域の店舗の方々と共働りし、障害のある方にとってもわかりやすいメニューを作成するなど、地域にアクセシビリティを広げていきます。また、アートの魅力を視覚障害の方や盲ろうの人に味わってもらうため、作品の芸術性が伝わる鑑賞サポートツールを当事者や専門家とともに制作し、鑑賞会を開催することで検証します。

### カルチュラル・デモクラシーの実現に向けて

あらゆる人がアートの参画者となるための取り組みです。会場運営を担う「会場ボランティア」、情報発信を行う「NO-MA記者クラブ」、学びの場・交流の場のファシリテートする「エデュケーション・サポーター」の活動を実施します。これらを通して、誰もがアートの参画者となるような状況を生み出し、カルチュラル・デモクラシー（文化の民主性）の実現を目指します。





アートの驚きを共有する



## 実施内容とねらい

### 共有する「場」としての芸術祭

「アートの驚きを共有する」をテーマに実施した主たる内容は、芸術祭「ちかくのまち」の開催です。この芸術祭は、アート、地域、福祉の多領域を横断する論点をはらむような事業として設計しています。各領域の人々が枠にとらわれず参加し、相互的に関わり合いながら、作り上げていくことを目指しています。このため「ちかくのまち」は、催事というよりも、多様な立場の人々がアートを切り口に集結し、異なる価値観を共有するような「場」と考えるほうがふさわしいのかもしれません。

こうした「場」としての「ちかくのまち」を象徴する取り組みが、アーティスト同士によるコラボレーションです。このコラボレーションには、3つの期待が込められています。

まず1つは2人の表現者の交差により未だ見ぬ魅力的な作品が生まれることであり、2つ目にはコラボレーター間の関係性が育まれていくことです。

そして、今回のコラボレーションが、「障害のある人の表現をいかに発信するか」ということについて、新たな可能性を切り開くような先駆性のある取り組みとなることへの期待もあります。

また、このコラボレーションの一環として、パフォーマンスプログラムも行いました。パフォーマンスに着目することの背景には、障害のある人の表現のなかでも、形を残さず行われる表現行為——その人ならではの動きや興味深い習慣など——の発信方法について新たな実践を打ち立てるべきではないかという課題意識があることです。こうした形に残らない表現行為に対し、今回のプロジェクトでは、形に残らない表現行為者としてダンサーが介入し、「パフォーマンス」という視点を導入しながら、その表現を捉えるということを意図しています。多様なコラボレーションにより生まれる作品は芸術祭を彩り、育まれていく関係性は「ボーダレス・エリア近江八幡」形成に向けての示唆を与えるものとなりました。

### 複数会場での展示

#### 「ボーダレス・エリア近江八幡芸術祭ちかくのまち」の実施

会期：2020年9月19日(土)～11月23日(月・祝)

出展者：杉浦篤、ヤマガミユキヒロ、武友義樹×福留麻里、平野智之、鮎万里絵×谷澤紗和子、米田文、ドゥイ・プトロ×ナワ・トゥンガル、小西節雄、武友義樹、久保寛子、坂本三次郎×椎原保(展示順)  
計10組

#### 会場と来場者数

ボーダレス・アートミュージアムNO-MA (近江八幡市永原町上16)	1,177名
奥村家住宅 (近江八幡市永原町上8)	1,003名
近江八幡市安土B&G海洋センター (近江八幡市安土町下豊浦5428)	
よしきりの池 (B&G海洋センターの隣)	1,183名
計4会場	

### アーティストによる作品の共同制作

武友義樹×福留麻里  
鮎万里絵×谷澤紗和子  
ドゥイ・プトロ×ナワ・トゥンガル  
坂本三次郎×椎原保  
計4組

### パフォーマンスプログラムの実施

#### 「西の湖ほとりに教わるツアー」

出演者：福留麻里

日時：10月18日(日)16:00-17:00

会場：湖岸緑地西之湖園地(近江八幡市北之庄町)

来場者：9名





## 全体コンセプト

### ボーダレス・エリア近江八幡芸術祭 ちかくのまち

近江八幡市内4会場で繰り広げられた芸術祭です。10組のアーティストによる作品を展示しました。

[以下チラシより、コンセプト文抜粋]

知覚にあるこのまちで、アートとであう。

「ちかくのまち」は、近江八幡という“町”を舞台に、アーティストやサポーター、地域の方々などが参加し、みんなで作る芸術祭です。私たちの“知覚”を刺激してくれるアートや出来事との出会いが待っています。

歴史情緒残る旧市街地や、琵琶湖の内湖である西の湖のほとりに、10組のアーティストたちの作品を展示します。視覚に障害がある人の鑑賞をサポートするツールを用意するほか、作品を深く味わうための関連イベントを実施します。

アート、福祉、地域がボーダレスに関わり合って成り立つ本芸術祭。

決して遠くなく、あなたの知覚にある——

みなさま、ようこそ「ちかくのまち」へ。



### 芸術祭を巡る映像を公開

芸術祭を訪れることができなかった人や、実際に訪れた感想を訪れていない友人等にシェアしたい人を対象に、展示内容や雰囲気味わっていただくための、映像を作成し、YouTubeに公開しました。この映像には、目が見えない人や耳が聞こえない人に楽しんでもらえるようナレーションや字幕を付けました。また字幕には、文章の意味が伝わりやすくなるよう、語の区切りに空白を挟んで表記する「分かち書き」を取り入れています。

映像はこちらから視聴できます。→



### グラフィックデザインコンセプト

デザイン：有佐祐樹

「ちかくのまち」というタイトルには知覚のまちと近くのまちという二重の意味が含まれています。そこで、知覚そのものの手触りと地図をなぞる感覚とを重ね合わせて人間の身体が町のように地図上に広がるイメージを作りました。

この地図の身体は道路や地形によって描かれていますが、境界ははっきりしません。いつの間にか他の人と繋がっています。想像の中で地図上の道を歩くときにはその境界はより曖昧なものです。そしてそれは現実の町にも当てはまります。近くの町との境界は曖昧なものです。

様々な人たちの様々な知覚が橋渡しされている、そんな様子を形にできたらと考えました。

### 展示デザインコンセプト

デザイン：アトリエカフエ

展覧会で使われる展示台などの什器の意匠を統一しました。特筆すべきは、什器の表面が左官仕上げになっていることです。表面はモルタルなどであり、あえて塗り跡を残した什器デザインを採用しました。

一般的に、美術作品を設置する什器は、作品の印象をスレートに伝えるために、表面の質感を強調することは稀です。これに比べ、左官仕上げによる什器は、それ自体「もの」としての存在感があります。

今回のプロジェクトでは、目が見えない人、見えにくい人とアートを共有することも大切な取り組みであり、「触覚的」な体験に重きを置いています。質感を伝える意匠デザインは、芸術祭全体に、触覚的な印象を漂わせることを意図したものです。





## ボードレス・アートミュージアムNO-MA

NO-MAでは、4組のアーティストの作品を展示しました。このうち杉浦篤の展示については、視覚障害の人や盲ろうの人と一緒に作品の魅力を共有することを目指し、触覚的に作品を味わうための工夫を施した内容となっています。

また、ヤマガミユキヒロによる映像と線画で複数の町の風景を捉えた作品や、自身が訪れた各町の風景と空想を掛け合わせながら絵物語を紡ぐ平野智之の作品など、芸術祭タイトルの一部でもある「まち」を意識した展示も特徴です。

さらに、武友義樹と福留麻里によるコラボレーションも展示しました。2人の作品は、数日間の交流のなかで生まれた関係性が作品として形になり、2階の和室空間に繰り広げられました。

### 杉浦篤

出展作品は、杉浦が長い年月をかけて触ってきた写真です。写真には、旅行の様子や日常の出来事が写っています。思い入れのあるそれらの写真に触れることで、写真はしだいに擦り切れ、折れ跡がつき、独特の雰囲気を持つようになっていきます。

大切なものが写っている部分には、特に繰り返し触れるそうです。杉浦はほっと一息つける夕食後や、気持ちがソワソワしているときなどに写真と向き合っています。

杉浦作品の展示においては、視覚障害の人や盲ろうの人と一緒に楽しむための「鑑賞サポートツール」を制作しました。

【「鑑賞サポートツール」の取り組みについての詳細はP36をご覧ください】



### ヤマガミユキヒロ

作品《location hunting》は、一点一点額装され、壁に掛けられた11点のドローイングにそれぞれ映像が投影された作品です。

この作品は、ヤマガミが2003年から取り組む、「キャンバス・プロジェクト」という独自の手法で制作されています。その手法は、様々な場所の風景を鉛筆で描き、同じ視点から撮影した映像を、描いたドローイングに映し出すというものです。刻々と変化する日の光、雲の流れ、行き交う人などの映像は、まるでその場所の物語が浮かび上がってくるかのように、描きとどめた風景に重ねられています。



### 武友義樹 × 福留麻里

武友は、紐を振って滑らかに波立たせる行為を、50年以上続けています。紐を振る行為のほかに、巨大な陶器の作品を作る、ちぎった紙をポケットに大量に詰めるなど、武友には様々な側面があります。

福留は、日常的な仕草にもとづく微妙な動きを題材にダンスを制作しています。また、ダンスという行為から引き起こされる身体感覚を言葉にするプロジェクトなどを行い、様々な人や場所との繋がりや、そのやりとりから生まれる感触を見つめ、踊りを紡いでいます。

本作は2人によるコラボ作品です。福留が武友の暮らす施設を訪問し、交流したことから生まれた関係が、滞在期間中に収録した映像や音声、福留が紡いだ言葉などを構成要素とした、インスタレーション作品として形になり、展示しました。

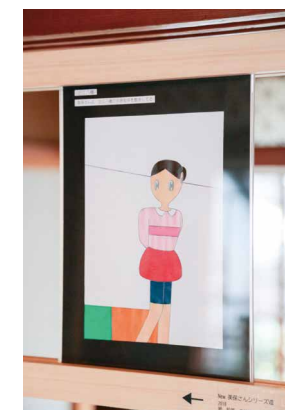
【コラボレーションの詳細はP22をご覧ください】



### 平野智之

平野は、軽やかなタッチのイラストと本人が「字幕」と呼ぶユニークな短文によって、「美保さんシリーズ」をはじめ、様々な物語を作っています。主人公である美保さんは、以前、平野が通う施設の支援員をしていた人がモデルです。また、物語は、過去に訪れたことのある場所が舞台となっています。物語のなかでは、美保さんの瞳に電車が飛び込んできたり、体が透明になってしまったり、美保さんが右往左往する想定外の出来事が次々と起こります。

なお、今回の展示は、平野と本芸術祭の関わりが伝わるドキュメンタリー的な構成となりました。





## 奥村家住宅

奥村家住宅は、江戸時代後期に建てられた建物で、かつては呉服屋を営まれていました。昔ながらの和の趣を残す町屋が、本芸術祭の2つ目の会場です。

会場の空間としての持ち味も活かしつつ、作品の展示を行いました。奥村家住宅では、2つのコラボレーションが繰り広げられました。畳の間に展示した鮎万里絵×谷澤紗和子による切り絵とドローイングのシリーズ、蔵座敷に展示したドゥイ・プトロ×ナワ・トゥンガルによる絵と映像の作品です。

また、地元の方々の手により、定期的に入入れが行われている庭園には、米田文の陶芸作品を展示しました。それぞれの作品が存在感を放ちつつ、奥村家住宅の空間との呼応を見せました。

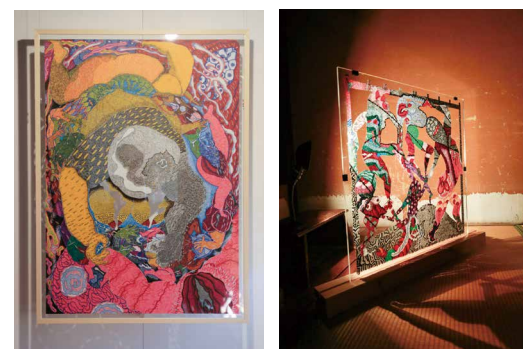


### 鮎万里絵×谷澤紗和子

鮎の絵には、ふくよかな身体の女性、乳房、性器、ハサミなどが繰り返し登場します。会場には、布の人形の作品や、額装用の厚紙に描いた作品、ドローイングと切り絵が合わさった作品など、鮎の近作を展示しました。エロティックだったり畏れを抱かせたりする一方で、日常の出来事を隠喩するようなさりげないユーモアも散りばめられています。

同じく母屋には谷澤の作品が展示されました。谷澤は「妄想力の拡張」をテーマに、切り紙と光と影によるインスタレーションや、貝殻と土で焼き上げたオブジェを制作しています。近年は小説家の藤野可織とのコラボレーションも展開しています。出展作品には、近現代美術史に出てくる重要な作家の作品をなぞらえつつ、女性やマイノリティという新たなテーマ性が垣間見えます。

2人それぞれの作品を鑑賞した先の開けた畳の間に、コラボレーションによって生まれた作品を展示しました。



### 米田文

米田は石川県金沢市で活動する陶芸作家です。家や人、動植物、風景など、日常的な題材をテーマに、思わず見入ってしまうような優美な魅力に溢れた作品を制作しています。庭に展示された作品は、1998年から2年間制作していた、「うずまきさん」というシリーズです。

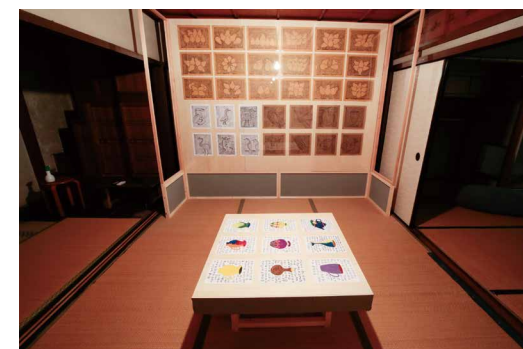
作品を構成する一つひとつが、1cm程度の小さな「うず」でできています。それらは、互いに連なり、一つの形になっています。自然にできた形のようなものもあれば、どこか動物を連想するような形もあり、観る人の想像を膨らませます。



### ドゥイ・プトロ×ナワ・トゥンガル

蔵座敷には、ドゥイとナワの作品を展示しました。兄のドゥイは、「ワヤン・クリ」というインドネシア伝統の影絵芝居に登場する人形を独自に描き続けています。また、弟のナワは、兄の制作を支え、インドネシア・アール・ブリュット・ファンデーションを仲間と立ち上げ活動しています。

ナワの映像作品は、ドゥイの絵をもとに制作されました。悪霊や危険から身を守るために演じられる、ジャワ島の伝統であるルワットという影絵芝居がもとになっており、全世界が新型コロナウイルス感染症から解放されることへの祈りと希望が込められています。





## 近江八幡市安土 B&G 海洋センター、よしきりの池

屋外展示作品の展示会場となった B&G 海洋センターとよしきりの池は、NO-MA、奥村家住宅がある、近江八幡の旧市街地から車でおよそ 15 分の距離にあります。B&G 海洋センターに展示したのは、小西節雄のカカシの作品です。様々なポーズをとるカカシたちが会場を彩りました。すぐとなりにあるよしきりの池では、武友義樹による陶芸、久保寛子による立体造形、坂本三次郎×椎原保のコラボレーションによる自然物を用いたインスタレーション作品を展示しました。

となりあう 2 つの会場は、かつての安土町（2010 年に合併し、現在は近江八幡市）エリアにあります。琵琶湖の内湖である「西の湖」を望むロケーションでもあり、旧市街地の雰囲気とは異なり、鑑賞者は草木や土の香り、湖、風などといった自然を肌で感じながら、ダイナミックに繰り広げられる作品と出会うことになりました。

### 小西節雄

海洋センターの屋外スペースには、魚釣りをするカカシや、ビールを飲むカカシなど、様々なシチュエーションのカカシが展示されました。ユニークなカカシを作ったのは小西です。小西は、定年退職した後、畑のスイカを食い荒らすカラスを除けるために、カカシを作り始めました。そのうち、カラスを除けることより、カカシを制作することに夢中になったそうです。

小西の畑や自宅付近には、本物の人間と見間違えるようなたくさんのカカシが様々なポーズをとっています。“案山子街道”とも呼ばれ、地域では有名になっています。



### 武友義樹

NO-MA の会場では、福留麻里とコラボレーションしていた武友の陶器の作品です。武友は過去に、陶土を紐状にして積み上げ、壺を制作していました。

その作品の大きさはそのときの武友の気分や、天候に影響されるそうです。土が乾き始めると、それ以上積み上げるのが嫌になるようで、夏場の作品は（気温が高く早く土が乾くため）低く、冬場の作品は高くなったそうです。うねるような形に焼き上げられた作品は、ずっと前からそこにあったような自然な風合いを感じさせます。



### 久保寛子

久保は先史芸術や民族芸術などに着想を得ながら、巨大な立体作品を制作しています。展示会場には、池の水面に浮かぶ 3m にもおよぶ顔の作品や動物の作品が展示されました。

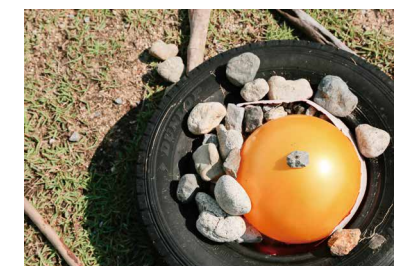
顔や動物の作品は、鉄製の骨組みで形作られています。それらは人工的な色味のネットで覆われ、周りの自然環境のなかでひととき目を引きまします。一方、モチーフとなっているのは「生き物」で、それは自然物の極致にある存在といえるでしょう。久保の作品が自然とともにある様子は、古から、人間が自然に畏怖の念を抱き、想像し続けてきた超自然的な世界観と重なります。



### 坂本三次郎×椎原保

坂本は、暮らしていた福祉施設の空き地で、新たな「空間」を作り出す行為を、20 年以上続けていました。葉っぱや石、木、コンクリートブロックなど、身近にある材料を拾い集めてきては、枠を形作るかのように並べ、何度も配置を変えながら並べ続けました。

美術家の椎原もまた、鏡や光など日常のなかで関わりの深いものを素材として、それらを配置します。場所や人の感覚、モノがもつ記憶を結びつけるようなインスタレーションを制作しています。会場では、2 人によるコラボレーション作品が展開されました。





## アーティストによる作品の共同制作

### 武友義樹 × 福留麻里

武友は、滋賀県の入所型の福祉施設で日々を送りながら、紐を波立たせて振る行為を続けています。この行為は、幼少のころから始まり、50年以上続く習慣となっています。そんな武友の元に、ダンサーの福留が訪れ、パフォーマンスアートの共同制作が始まりました。

紐を振ったり、手探りのコミュニケーションを重ねたりしながら、一緒に時間を過ごし、互いに理解や想像を深めていきました。2人の関わりからこの展示が生まれ、また近江八幡の西の湖のほとりにある自然豊かな会場で、ダンスパフォーマンスも繰り広げられました。

【ダンスパフォーマンスの詳細はP22をご覧ください】



### 鮎万里絵 × 谷澤紗和子

昨年の芸術祭では、2人がそれぞれの出展者として名を連ねていました。このことがきっかけとなり始まったのが、2人によるコラボレーションです。

共同制作を始めた時点では、まだ実際には会っていなかった2人による共同制作の方法として、文通が選ばれました。谷澤が紙を切り、鮎に送付する。これを受け取った鮎が彩色を施す。2人の間を往復する形で、作品が作られていきました。「ちかくのまち」では、それぞれの作品と、共作で生まれた作品を展示しています。

今回の共作は、お互いの作品を起点に関係の生じた2人の交流の延長線上に展開されているものであるといえます。それゆえ、本芸術祭での展示は終着点ではなく、一つの通過点であり、今時点の2人の重なる具現化であるといえるでしょう。



### ドゥイ・プトロ × ナワ・トゥンガル

ジャーナリストのナワは、自身の兄であり、精神障害があるドゥイ・プトロの表現手段である絵に寄り添ってきました。これまでドゥイが描くための画材の提供や、展覧会出展への調整など、制作をサポートするとともに、その魅力を発信するための取り組みを行ってきました。

「ちかくのまち」に出展した《Theaterical Lukisan "Ruwat"》は、全世界が新型コロナウイルス感染症から解放されることへの祈りと希望が込められた映像作品であり、ナワが兄の作品を軸に映像を制作したものです。ジャワ島に伝わる「Ruwat」という悪霊や危険から身を守るための影絵芝居がもとになっていて、ドゥイ・プトロの絵が人形の代わりに置き換えられています。兄をサポートする関わり方を超え、共同で作品を作るという新たな段階の関係のあり方が、作品から見えてきます。



### 坂本三太郎 × 椎原保

出展作品は、椎原が坂本の行為を着想源として制作したものです。作品を作るにあたり、椎原は、坂本の行為を写した写真や、生前、坂本をサポートしていた職員の証言を手掛かりにしています。限られた当時を知る術から、椎原は坂本の制作動機を探っていく作業を行いました。インスタレーションに使う素材は、どこかで購入するなどといったことはせず、会場周辺で拾ったものに限ることになりました。これは、坂本の思考回路をなぞるなかで、椎原が立てた方針です。

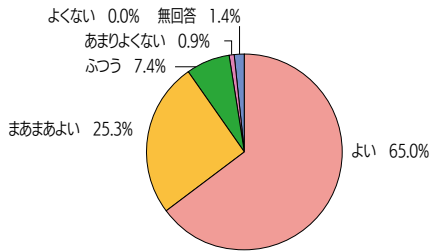
場所も違えば集まるものも違うので、椎原は坂本の作品を完全に再現するのではなく、「もし、この場所に坂本さんがいたら……」と想像しながら、坂本になりきって、空間を作っていました。



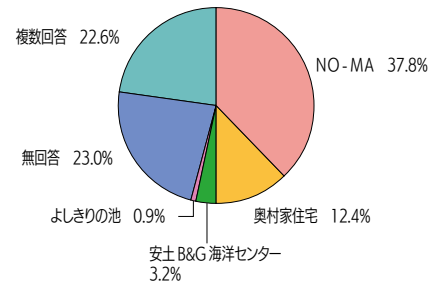


# 来場者アンケート

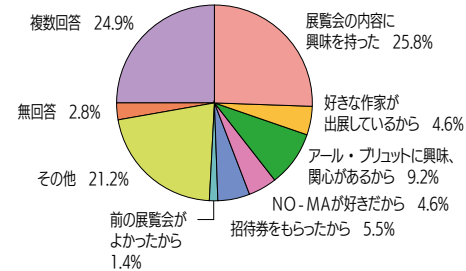
## Q1. 展覧会の印象は?



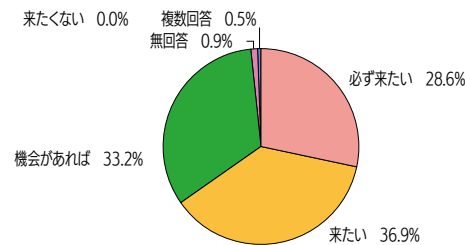
## Q2. どの会場が印象に残った?



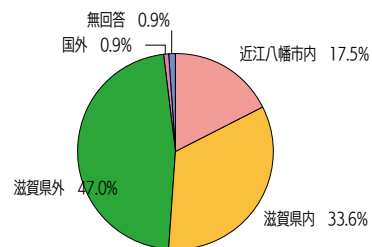
## Q3. この展覧会に行こうと思ったきっかけは?



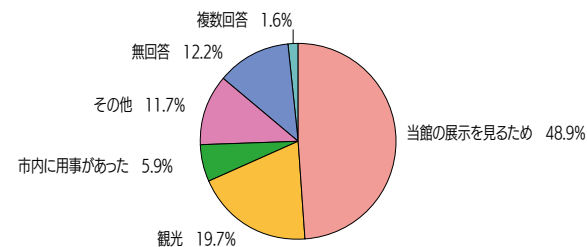
## Q4. ミュージアムにまた来たい?



## Q5. どちらから?



## Q6. 近江八幡に来た理由は?



## 皆さんから寄せられた声をお届けします。

美保さんに愛着がわいた。抱きかかえながら観ると家族におしえてもらっているみたい。  
20代・女性

他の展覧会作品に比べ、じっと見入ってしまう作品が多く非常に満足でした。「そんな表現方法があるのか!？」と驚かされることばかりでした。  
20代・男性

外観からは想像できないほど素敵でした。そして、最新デジタルが駆使されている充実した内容だったと思います。「ヤマガミユキヒロ」さんの作品は情緒があり、一つの映画作品のように言い表すことのできない気持ちになりました。目が離せなかったです。  
30代・女性

手で触れる絵がよかったです。コロナ禍で大変というご苦労があると思いますが…  
50代・女性

町と美術がうまく共存していて、居心地がよく鑑賞できる場所が好きです。  
30代・女性

安土B&G海洋センターにお世話になりました。雨の中会場を案内していただき、学芸員の方に感謝いたします。ボランティアの方も親切に迎えていただき、子どもたちがのびのび心を癒されてきました。新しく楽しい発想もどんどん出てきました。ありがとうございました。  
50代・女性

このように町を活かして、アートを楽しむ取り組みは、とてもいいと思いました。また、町の活用方法を考えるきっかけとなり、お互いがよい関係を持てればと思います。  
40代・男性

優しい気持ちになりました。新しい「見え方」を感じました。  
10代・女性

今回の展示も楽しく拝見させていただきました。町と建物、展示物すべてが興味深く新鮮でした。屋外(池など)も、その空気、におい虫の音など含めて、すべてが一つであるように感じました。  
50代・女性

自分に見えているものが、狭く思いました。  
10代・女性

かかしが大変よかった。  
70歳以上・男性

障害者の作品という説明はないが、自分なりに感じる場所もあった。  
70歳以上・男性





## パフォーマンスプログラムの概要

### 二人の関係性の具現化により、作品が生み出された

パフォーマンスプログラムではダンサーの福留麻里と武友義樹の共働から、二つの作品が生み出されました。一つはインスタレーションとしてボーダレス・アートミュージアムNO-MAで展示され、もう一つはパフォーマンスとして、近江八幡にある自然豊かな西の湖のほとりで上演されました。

武友は小さいころから紐と一緒に生活し、毎日紐を振り続けています。紐を扱う熟練した手つきや紐の動きの強さや美しさには、見とれてしまうほどです。福留は武友との距離感を繊細に測りながら、時に遠くから、時に大胆に距離を縮め、関係性を築いていきました。生み出された二つの作品はともに二人の関係性の具現化でもあります。

障害のある人とアーティストとの共働をどのようなプロセスで行うことができるのかについて考えるにあたって、とても意義深いプログラムとなりました。

### PROFILE



**武友義樹** 1963- 滋賀県在住

福祉施設で暮らし、幼少のころから50年以上、波のような動きをつけて紐を振る行為を続けている。持ち手にナイロン製の紐が取り付けられており、武友は施設内から紐を探して来ては結び付け、紐は支援員が夜中にこっそりきるまで際限なく長くなる。武友は入浴時と外出時以外に紐を手放すことはなく、強い愛着がある。施設では「あめちゃんほしい」と支援員にしきりに訴えており、もらえないとかんしゃくを起こす一面もある。紐を振る行為のほかに、巨大な陶器の作品を作る、ちぎった紙をポケットに大量に詰めるなど、武友には様々な側面がある。



**福留麻里** 1979- 山口県在住

ダンサー・振付家。2001年より新鋪美佳とともに身長155cmダンスデュオほうほう堂として活動。独自のダンスの更新を試みる。2014年より個人活動開始。劇場での作品発表、川原、公園、美術館、道など、様々な場所でのパフォーマンスやワークショップ。他分野作家との共同制作を継続的に行ない、いくつもの関係性とそのやりとりから生まれる感覚や考えや動きを見つめ紡いでいる。近年では2018年より演劇作家村社祐太郎との共同制作を継続的に行う。2019年、からだに対する小さな指示書をSNSで配信する「ひみつのからだレシピ」をBONUS (木村寛) と共同企画。「Whenever Wherever Festival」、「ダンス作戦会議」メンバー。2020年度セゾンフェロー I。

### 施設での交流



### インスタレーション



### パフォーマンス







## パフォーマンスと展示 武友義樹×福留麻里

### 西の湖ほとりに教わるツアー

出演者：福留麻里 (ダンサー)

パフォーマンス日時：2020年10月18日 (日) 16:00 ~ 17:00

会場：湖岸緑地西之湖園地 (滋賀県近江八幡市北之庄町)

参加者：9名

協力：市川平、株式会社奥田工務店、  
一般社団法人近江八幡観光物産協会、  
社会福祉法人湖北会 湖北まこも



### ちょうどよい結び目をつくる—武友さんのサークル

出演：武友義樹×福留麻里

制作物：映像 (時里充)

展示会場：ボードレス・アートミュージアムNO-MA



### 「ちかくのまち」パフォーマンスプログラム

YouTube「NO-MAチャンネル」にて動画配信中

パフォーマンスと展示作品は、NO-MAのYouTubeで映像を公開しています。右のQRコードからアクセスして視聴することができます。



### 共働のプロセス

2020年9月、福留が、武友が暮らす福祉施設を訪ねることから二人の共働がはじまりました。武友の普段の生活に接しながら、福留は踊り、会話を試み、また一緒に遊び、交流を行いました。言語によるコミュニケーションがほとんど取れない武友と接するにあたって、福留は身体や道具を介した非言語的なコミュニケーションを用いて、会話を取り交わしていったのです。

福留は武友が日常的に行っていることを観察し、そこにあると思われる感覚や行為を短い言葉として抽出し、連ねていきました。その言葉はパフォーマンスやインスタレーションのなかで使用されています。

西の湖のほとりで行ったパフォーマンスには、武友も出演予定でしたが、武友自身の特性により本人への負担が大きかったことや新型コロナウイルスの感染状況を鑑みて、出演はかないませんでした。

当日行われたパフォーマンスでは、観客はガイドに案内されて会場内を歩いて巡りながら、福留の踊りを鑑賞します。ガイドが持つスピーカーからは、福留が武友から教わったことが、短い言葉で流されました。

2020年9月

訪問日数：5日間



2020年10月

訪問日数：2日間



訪問施設：社会福祉法人湖北会 湖北まこも



## コラム Column

武友義樹と福留麻里の共働は、ボードレス・エリア近江八幡アカデミーのテーマでも取り上げました。映像制作での共働は実現したものの、新型コロナウイルスの影響で、西之湖園地で行われたパフォーマンスに武友が出演することはできませんでした。離れた場所で行われたパフォーマンスに、どのような共働が生まれたのでしょうか。

ボードレス・エリア近江八幡アカデミー

第2回 10月25日(日)

一限目：「障害のある人と作品を作る ～武友義樹×福留麻里の共働」

先生：福留麻里(ダンサー)

西川賢司(社会福祉法人グロー 企画事業部文化芸術推進課長)

ともに過ごした時間があるからこそ、  
その場になくても気配や存在を伝える

**西川** 福留さんが西の湖のほとりでパフォーマンスをしているとき、ご案内していたガイドが、武友さんの暮らす湖北まこもの方角を指して、「武友さんは今日も紐を振っています」とつぶやきました。その瞬間、何となくですが、私はコラボレーションが成立したように感じたんです。コロナ禍でいろいろなことが分断されるなか、「コラボレーションとは何か?」と考えさせられましたが、離れていても思いを馳せることでつながることができるのではないかと、素直に思えたのです。

福留さんとガイドは実際に湖北まこもで武友さんと時間を過ごしました。一人が踊り、一人が「今日も紐を振っている」と言葉を発して思いを馳せる。その二人だからこそ、言葉に重みが出たのではないのでしょうか。様々な制約の中、とりあえず時間を共有して何かを生み出すというやり方でコラボレーションに取り組んだのですが、自由な形を生み出すことができたのではないかと感じています。とてもいい作品ができました。アーティストとして、福留さん自身の変化のようなものがあれば、お話しいただけますか?

**福留** 武友さんがその場にいらなくても、見に来た方も含めて、どうやったら武友さんの気配や存在を感じながら時間を過ごせるかと考えていました。

NO-MAの展示でも、パフォーマンスを作るうえでも、武友さんと時間を過ごすなかで、勝手に教わったこと、抽出した短いテキスト(言葉)が軸になっています。一見すると、抽象的な言葉に映ると思うのですが、すべて武友さんが運動している様子に基づいたテキストです。例えば、「地面をとらえる」。紐を振る前に、しっかり立って、紐を振る準備をしている様子です。「しっぽをはやす」は、武友さんが持っている紐が、まるで体の一部なんじゃないかと思えて、出てきた言葉です。その紐を振ることで空気を切ったり、紐が地面に触れることで地面との関係が武友さんに伝わっている。武友さんは、そうやって世界と関わってるんじゃないでしょうか。

自分の意思ではなく、武友の行動が動く理由となっていた

**福留** また、「呪文」「念仏」という言葉もテキストに出てきます。あるとき、武友さんが急に「ヨンゴヨンゴヨンゴ」と呪文のような言葉を唱え始めたんです。支援員の方に聞くと、「あれは武友さんが住んでいる余呉(よご)という地名をずっと言ってるんです」と教えてくれました。武友さんに限らず、「あめちゃん」とか「パン」とか、ずっと唱えるように繰り返す方がいました。それが、ただ単にほしくて唱えているだけではなく、なんだか念仏のように聞こえたり、呪文のように思えたり、私の身体のなかに、「わー」って入ってくるような感覚があったんです。

武友さんの行動を見て、少し踏み込んで、「何をしているんだろう?」と考えることで、自分が日々やっていることと結び付けたり、勝手に何かを教わっていた感覚です。そのときの私は、私自身の意思で動いているというより、武友さんとの関係のなかで教わったことを基にして動くという感覚がありました。それは新鮮なものでした。武友さんと時間や空間を共有したことで、その場の空気や、声、いろいろな人の行動などが、私の動く理由に結び付いたのかなと思います。まだ消化しきれていない部分もあるのですが、この感覚は今後、何度も思い出す気がしています。

## 百瀬文 プロジェクトの記録

### コロナ禍で実現しなかったプロジェクト

パフォーマンス・プログラムでは、当初、福留麻里の作品ともう一つ、アーティスト・百瀬文によるプログラムを実施する予定でした。しかし、新型コロナウイルス感染拡大の影響を受けて、本芸術祭での実施を断念。百瀬の作品は屋外でパフォーマンスを行い、映像作品を制作する予定でしたが、なぜ実現できなかったのでしょうか。

実現を目指した過程、突き当たった問題、壁を乗り越えようとするアプローチを記録することは、今後、困難に直面した際の指標になると考えています。また、百瀬自身がどのような考察を持っているのか、併せて掲載します。コロナ禍で「接触」について、考え続けた日々の記録です。



「Using / Being the Cutlery」

### 百瀬文作品の概要

何人かの人々に参加を承諾してもらったうえで、ある条件を持った食卓の席を設けます。

人々は、それぞれ隣の人の片方の手を「食器」として使い、食事を行うと同時に、自分の片方の手を隣の人のための「食器」として差し出さなければなりません。

他人の指が自分の口の中に入り込むことと、自分の指が他人の口の中に入り込むこと。それが同時に起こるとき、そこに生じる感情の微妙な揺らぎやうねりを捉える作品です。

### コロナ禍で本作品を実施する意義として考えたこと

新型コロナウイルスの感染拡大により、「接触」の持つ意味合いが大きく変化しましたが、障害を含め様々な理由から、他人との接触を避けられない生活を送っている人々がいます。コロナ禍で求められる新しい生活のスタイルは、そのような人々と接触することへのためらいや、そのような人々への差別など、様々な分断を生み出しています。

他者の体を、「汚れ」とみなしてしまう意識を切り離し、他者の体と触れ合うことをためらう感情も含めて受け入れる「接触」の形を手に行うことができるかどうか。躊躇や恐怖という感情が、他者との行為を繰り返すことでどのように変化していくのか。本作品はこのような意図をもって考えられ、コロナ禍において実施することに意義があると考えました。

### プロジェクト進行のプロセス

#### アーティストへの依頼

2020年5月

事務局から百瀬にアプローチして、芸術祭への参加を打診しました。百瀬はパフォーマンスを撮影する映像作家であり、身体の境界や、自己が分裂する経験について考察するような作品を制作してきました。そのような作品は障害の有無に関わらず、人間の根源的な姿について深く考えるきっかけを与えてくれるのではないかと考えました。

2020年6月中旬

第1回実行委員会開催。事務局から今年度の事業概要を説明し承認されました。出展者やイベント詳細については、事務局一任で進めることとしました。

#### 会場の視察、打合せ

2020年7月初旬

百瀬が滋賀に来て、パフォーマンス会場の候補地となる屋外スペースを視察しました。また、作品について打ち合わせを行いました。新型コロナウイルスの感染拡大を受け、実施に当たってはアルコール消毒等の感染対策を行うほか、参加者を「接触と生活とが不可分な人」に限定すること、同意を取るプロセスに時間をかけることなどを話し合いました。また接触を伴う作品であるため、実施については、事務局が実行委員会の各委員に個別に確認することとしました。



会場を視察する百瀬

#### 実行委員への確認

2020年7月中旬

作品の実施について8名の実行委員から意見集約を行いました。すべての委員が作品の意図について理解を示しましたが、接触に伴う感染のリスクがあることと、感染を助長しているといった意図しない捉え方をされてしまうリスクがあるのではないかと指摘があり、全員の賛成は得られませんでした。

#### 最終判断

2020年7月下旬

各委員の意見を踏まえ、実行委員会として百瀬の作品の実施を取りやめることを実行委員長が判断しました。パフォーマンスを実施できないことと、その理由を事務局が百瀬に報告。百瀬と事務局で代案による実施の可能性について検討しました。

しかし、今回、実施できない理由が、感染のリスクがあることだけでなく、感染を助長しているような間違った意図で伝わるリスクがあるといったことが含まれていたことに、作品を生み出すことで議論が始まるような作品を制作してきた百瀬には強い戸惑いがありました。最終的には百瀬から芸術祭への出品辞退の意向が示され、百瀬の出品を断念しました。



## 寄稿：百瀬文「接触を伴う制作の是非をめぐって」

何らかの外的要因によって作品が展示できなくなるという経験が、今まで自分になかったわけではない。ある美術館の展示では水や土を使うことができないということがあったし、あるアジア地域の展示では社会主義批判を含む内容の作品は展示できないと言われたことがある。今回自分の構想した作品が展示できないという理由として挙げられた「感染リスク」という言葉は、今まで私が経験したことのない、かつ前述したような理由よりも遥かに倫理的判断を迫ってくる言葉だった。そこには紛れもなく人の命に関わるからである。作品を制作する行為、特に人々と協働して何かを作るタイプのアーティストの行為は、常にこれからこの問題を突きつけられることになる。私の場合はそれだけではなく、自分と他者との境界を融解させるようなコミュニケーションの複層性が作品のテーマでもあり、他者との接触そのものが創作の根幹にあるものだった。

作品を構想した時点での状況と現在の状況は異なり、私の当時の思いも変化している部分はあるが、この作品を構想した経緯について少し書き留めておきたい。

たった一年前、そこには「接触」という行為をめぐるあからさまな社会構造の非対称性があった。リモートワークに柔軟に対応できて「感染リスク」を減らせるホワイトカラーの人々の生活は、常にそのリスクに晒される Amazon の配達員やスーパーの従業員たちの労働によって成り立っている。そのほかに、接触が自らの生存に「必要不可欠」な人たちもいる。例えば盲者は点字に触れることで生活に必要な情報を読み取り、ろう者もコミュニケーションの際に相手の体に触れて注意を向けたりする。そのほかに身の回りのものを口に入れることで世界のかたちを把握するような、そんな行動癖を持った人もいるだろう。

「接触」の可否を選べる者たちだけで作られたルールがある。それに従うことが難しい者たちはどうしたらいいのだろう。私が当初提案した構想は、そのような人たち、生きる上でどうしても接触を選ばざるを得ない人たちだけで食卓を囲み、互いの手を食器にすることだった。相手の手（身体）を信頼し、受け入れるということ。そこで躊躇が生まれてしまったら無理をしないこと。自分の手もまた、食器として相手に差し出すこと。失われてしまった「信頼」のかたちを、私は何らかの方法で取り戻したかったのだと思う。そこには他者との接触面のディテールがどんどん失われ、均一での特撮画面に集約されることに対するフラストレーションもあったのかもしれない。

接触はあれど、物理的には互いの唾液が交換されない構造のパフォーマンスだったので可能だろうと思ったが、やはり実現は難しいと言われてしまった。現在は、ものに接触することによる間接的な感染リスクよりも、飛沫による直接的な感染リスクの方が高いというアメリカの研究結果が出ており、当時は苦渋の選択だったが、今になってみれば当然で仕方ないことだったと思う。

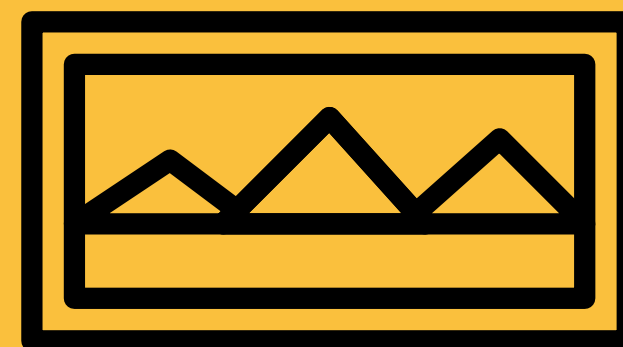
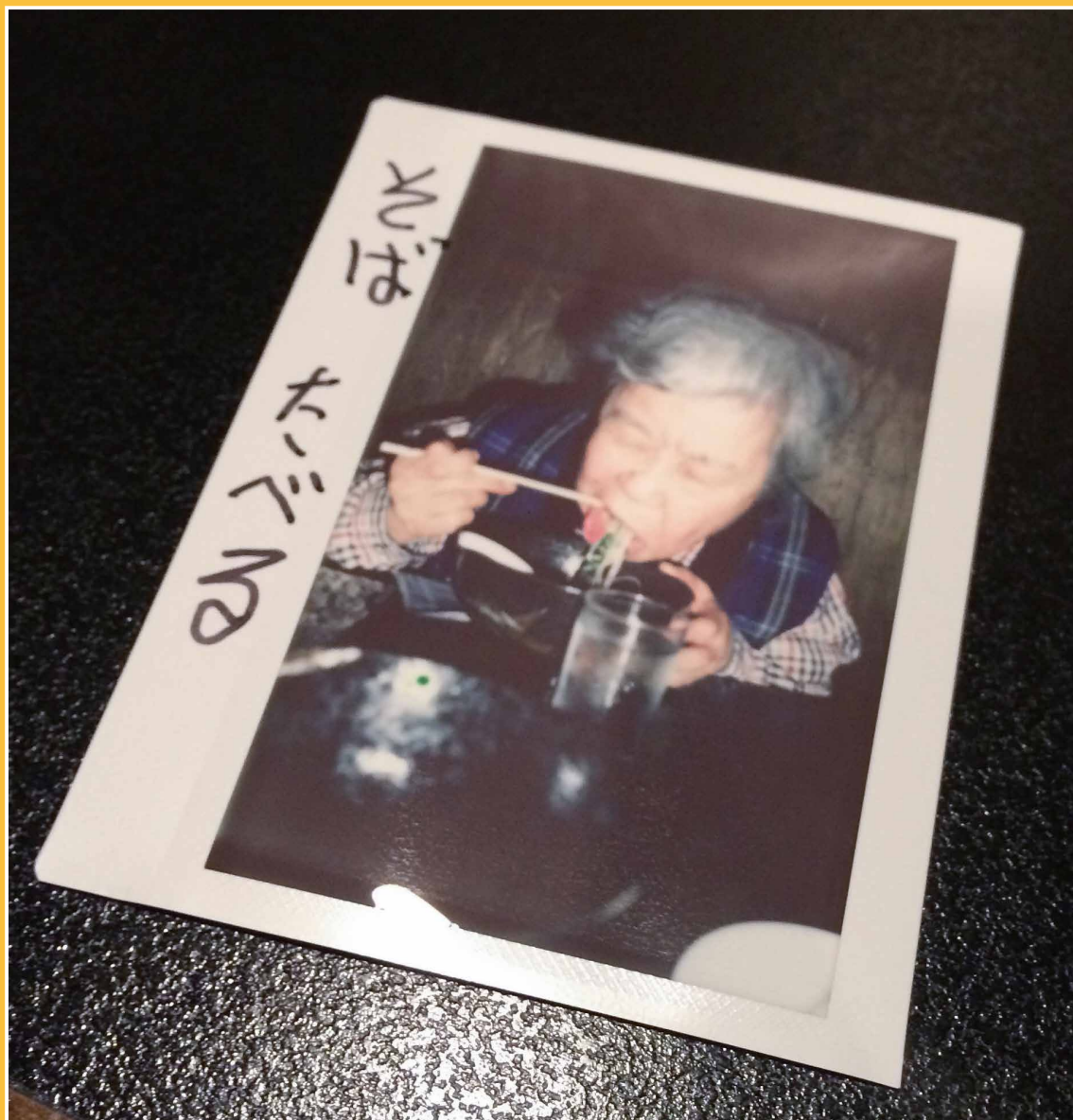
しかし一方で、当時は「接触行為のイメージ」そのものが、世間でまるでウイルス並みに忌避されているように感じたのが気にかかった。絵画ではおそらくその問題は起きないだろう。当たり前のことかもしれないが、写真や映像などそこに生身の現実の身体が存在するメディアにおいてのみ、この倫理的葛藤が起きるのだ。そこでは、作品の自律性より前に、現実が存在する身体が、公共圏を脅かす存在であるかどうかということがまず問われるのである。綿密な合意の上で、かつ PCR 検査で互いの陰性を確かめ合い、それでも接触を伴う行為をするという表現者に、時として私はならざるを得ない。原則として、創作行為とは「勝手になされる」ものであり、その切実さは強度にもなり得たりする。しかしそれは倫理的な正しさとは本来まったく関係のないものなのだ。私はいまだに結論を出せておらず、しばらくそのことをこの宙吊りになった身体で考えていくつもりである。

Profile

百瀬文 MOMOSE Aya

アーティスト。主な個展に「I.C.A.N.S.E.E.Y.O.U」(EFAG、2019年)、「サンプルボイス」(横浜美術館アートギャラリー 1、2014年)、主なグループ展に「彼女たちは歌う」(東京藝術大学 美術館陳列館、2020年)、「六本木クロッシング 2016 展：僕の身体、あなたの声」(森美術館、2016年)、「アーティスト・ファイル 2015 隣の部屋——日本と韓国の作家たち」(国立新美術館、韓国国立現代美術館、2015-16年)など。





芸術作品や町を楽しむ  
ことを当たり前





## 実施内容とねらい

### 鑑賞サポートツールを制作して、アクセシビリティの地域拡充を目指す

芸術作品を楽しむとき、私たちは目で見て得られた色や形などの情報を認識して、驚いたり、安らいだりと心を動かします。美術館に展示されている芸術作品は、額装されていたり、アクリルケースに覆われていることがほとんどで、目で見える鑑賞が中心となっています。

このような展示において、目が見えない、見えにくい視覚障害の人や盲ろうの人は、芸術作品をどのように鑑賞すればよいのでしょうか。“ボーダレス・エリア近江八幡”をみんなで作るプロジェクトでは、障害の有無に関わらず、誰もが芸術文化を鑑賞することも大きな目的に掲げています。

昨年は木彫やレリーフの「触れる」作品を展示して鑑賞方法の幅を広げましたが、今年度は、新型コロナウイルスを踏まえ、新たな鑑賞方法を探っていくことからプロジェクトがスタートしました。盲ろうの人、支援者、専門家らと共働して鑑賞サポートツールの制作に取り組み、作品の形状を伝えるだけでなく、その作品が持つ背景や作品の魅力を伝達する方法を模索。そのなかで、鑑賞において「触ることは欠かせない」と改めて確認したり、デジタルツールを導入することで、今後の可能性が開かれたりしました。

昨年度、平野智之との共働で生まれたぬいぐるみ状の音声ガイド「美保さんガイド」も広がりを見せました。昨年度は作品案内だけでしたが、今年度は地域の商店の情報が聞けるようになりました。この他にも様々なツールで情報保障を充実させることで、誰もが安心して町の散策も楽しめるようになることも、このプロジェクトの目指すところです。これらのツールがどのような場面で活躍し、どのように鑑賞の可能性を広げたのか。アクセシビリティの拡充がもたらした、参加者の笑顔や声をお届けします。

### 実施内容

#### 鑑賞サポート

- 作品のレプリカ
- 作品の立体コピー
- アクリル容器に入った素材
- リープモーション（壁に映った映像を自分で操作して、拡大縮小できる機器）
- NO-MA 展示会場の上面図
- 点字の作家、作品紹介を用意
- 音声ガイド「美保さんガイド」による作家、作品紹介

#### 地域へのアクセシビリティの拡充

- バリアフリーメニュー（点字メニュー、やさしいメニュー）
- 音声ガイド「美保さんガイド」による地域商店、オススメメニューの紹介
- ルート動画の作成
- わかりやすい周辺マップの作成

#### 障害のある人と作品を体感する鑑賞会

盲ろうの人、視覚障害の人と楽しむ“ランチと芸術鑑賞会”

9月30日（水）、10月9日（金）、11月9日（月）

アートをきっかけにいろんな感じ方をシェアしよう！

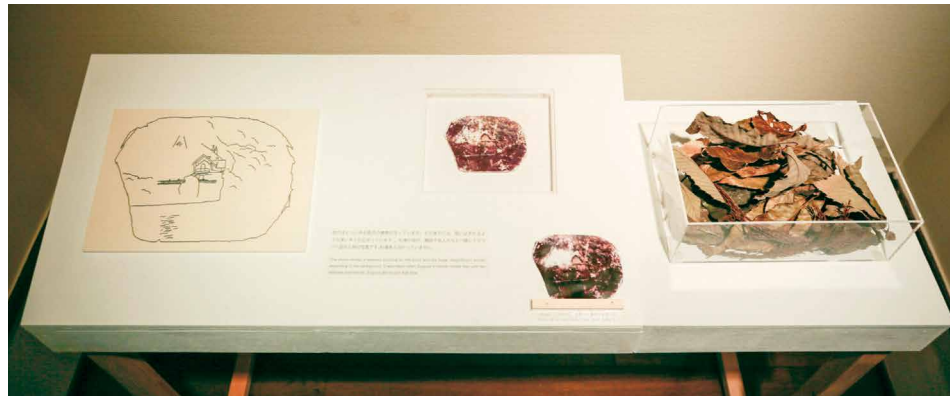
安土コース 10月17日（土） ※雨天のため中止

近江八幡コース 11月22日（日）



## 鑑賞サポートツールの作成

鑑賞サポートツールは、主に目が見えない、見えにくい人に作品鑑賞を楽しんでいただくという視点で考案されています。昨年度はレリーフや木彫を触って鑑賞いただきましたが、今年度は杉浦篤の平面作品（写真）の鑑賞方法を模索しました。作品の背景や魅力について、盲ろうの人や支援者にご意見を聞きながら、鑑賞サポートツールを制作しました。それぞれの特徴をご紹介します。



杉浦篤の作品そのものを含めた、様々なツールによる展示の様子

### 杉浦作品の鑑賞サポートツール

#### “触れる”展示台

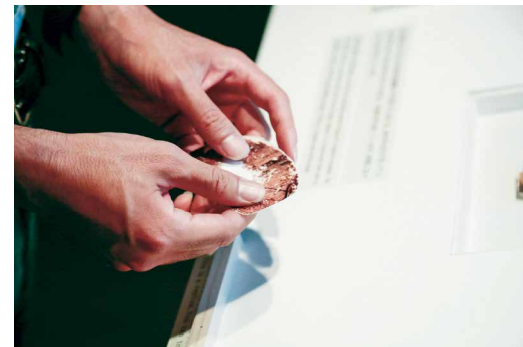
展示台の上には杉浦の作品と一緒に、触ることができる作品のレプリカや立体コピー、被写体の実物を展示しました。また、作品の背景が書かれた文章を添え、点字も用意しました。

#### 作品のレプリカ

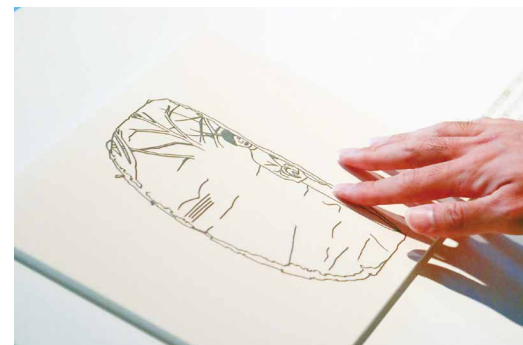
実際の作品の様子を触って確認できるよう、レプリカ（複製）を作りました。原寸大のレプリカに触ることで、作品の大きさや形がわかります。また、作者が何度もなで擦れた表面の様子も再現しました。

#### 立体コピー

作品に写っている被写体の輪郭をなぞって、線状で表現。その線を立体的に盛り上げた立体コピー（触図）を作成しました。大きさを拡大することによって、細部がわかるようにしました。



作品のレプリカ



立体コピー

#### アクリル容器に入った素材

作品に写っている落ち葉、砂浜の砂、石などをアクリル容器に入れて、触れるようにすることで写っている場面の雰囲気を感じられるようにしました。

#### リーブモーション

作品画像を自分が見たい大きさに拡大・縮小できるデジタルツールを取り入れました。展示台の上にある機器（リーブモーション）に手をかざし、手のひらを近づけたり遠ざけたりすることで、目の前の壁に映し出された作品画像を小さくしたり、大きくしたりすることができます。弱視の人の鑑賞をサポートするだけでなく、誰にとっても新たな見え方をもたらす鑑賞方法となりました。（p.12 参照）

#### 点字による作者、作品介绍

作家紹介文は日本文、英文に加えて点字も用意しました。杉浦作品については、作品それぞれにも紹介文が記されましたが、そこにも点字が添えられています。

#### 展示会場の上面図

NO-MAの入口に、指で触って展示会場の作品配置がわかる上面図（立体コピー）を作成しました。盲ろうの人や視覚障害の人に、展示空間を把握いただく試みです。

#### 鑑賞サポートツールを实际に使った感想

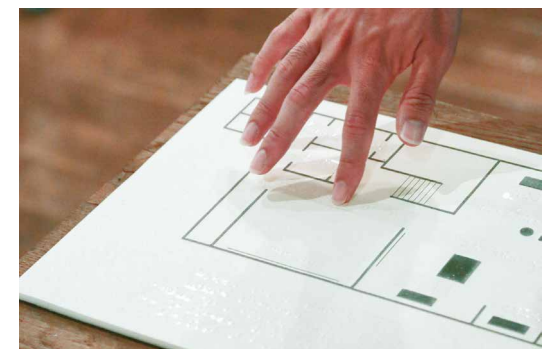
- はっぱなどを触ったことが一番よかったです。（通訳介助者）
- 写真が見えなくて残念。通訳者から説明を聞いてよかった。（盲ろう者）
- 立体コピーがもっと大きいとよかった。（通訳介助者）
- 触る写真は複雑な写真だとイメージができないようでした。（通訳介助者）



アクリル容器に入った素材



リーブモーション



展示会場の上面図





## 鑑賞サポートツールができるまで

新型コロナウイルスの影響もあり、接触を極力避けることが求められるなか、目で見える以外の方法で鑑賞するための鑑賞サポートツールが生まれた経緯を振り返ります。

### Step1 専門家との打ち合わせ

芸術祭に関わる空間デザイナー、デジタルメディア専門家、学芸員が打ち合わせをし、目で見える以外の方法での平面作品の鑑賞について検討しました。

#### 目標

- 盲ろうの人も楽しめる鑑賞サポートツールを作る。
- 展示だけでなく、作品が展示されている空間を把握できるものを作る。
- 作品から伝わってくる感覚を伝達できるようなものとする。

### Step2 盲ろう当事者、支援者へのヒアリング

NPO 法人しが盲ろう者友の会に協力いただき、盲ろう当事者、支援者へのヒアリングを専門家とともに実施しました。杉浦篤の写真作品のレプリカを鑑賞していただき、感想や意見を伺いました。

#### ご意見

- 作者が写真の表面を触り続けることで、イメージが剥がれていくという現象そのものがわからない。(当事者)
- 風景は、点字や文章での説明があればイメージできる。(当事者)
- 盲ろうの人が何かに触れて風景などをイメージすることは難しいのではないか。(支援者)
- 盲ろうの人はものに触れることが多いため、展覧会では感染症対応をしっかりと行ってほしい。(当事者)



盲ろう当事者、支援者へのヒアリング

### Step3 専門家との検討会議

しが盲ろう者友の会でのヒアリングを受けて、Step1の打ち合わせをしたメンバーで検討会議を行いました。鑑賞サポートツールの制作に向けて方向性を確認しました。

#### 方向性

- 鑑賞サポートツールを考えるにあたり、触れる要素は欠かせない。
- ツールのベースには、盲ろうの人の体験や経験がなくては伝わらない。わからないものをわかってもらうことを目指すのではなく、わかっていることに何かを上乗せすることで、作品の魅力を感じられるような鑑賞サポートツールを目指す。
- 点字や文字情報とレプリカの間、作品の雰囲気がかめたり、連想できたりする、触れるものを展示する(例えば、作品に写っている葉っぱや石など)。
- 弱視の人も鑑賞することを想定して、自分で操作して作品のアップを映像で見られるようなツールを用意する。感染症対策として、非接触型で操作できるようにする。

### Step4 広瀬浩二郎准教授へのヒアリング

国立民族学博物館准教授で、自身も視覚障害の当事者である広瀬浩二郎氏に、鑑賞サポートツールについてご意見を伺いました。また、写っているものや人がわかるような「触れる写真」を作ることや、展示空間の触れる図面を作ることを相談し、アドバイスをいただきました。

### Step5 鑑賞サポートツール作成

これらのプロセスを経て、鑑賞サポートツールを作成して、展覧会場に設置しました(P38-39参照)。しが盲ろう者友の会からのヒアリングの様子や、ツールを作成した制作者の思いは、ボーダレス・エリア近江八幡アカデミーでも取り上げました(P48-49参照)。



広瀬浩二郎准教授へのヒアリング



# 安心して町歩きを楽しむための取り組み

芸術祭の大きな目的に、誰もが安心して町歩きを楽しめるということがありますが、実現のためには地域との共働が欠かせません。昨年度は、お店の前にばったり床几を設置していただきましたが、今年度は、バリアフリーメニューやお店の情報が音声ガイドで聞ける案内板の設置などに協力いただきました。

## 1. バリアフリーメニュー

知的障害の人や視覚障害の人でも地域のお店に行きやすくなるように、NO-MA周辺の飲食店と協力してバリアフリーメニューを制作しました。バリアフリーメニューは、【やさしいメニュー、点字メニュー、音声メニュー】の総称です。

### やさしいメニュー

知的障害のある人、漢字や難しい文章を読むのが苦手な人、子ども、簡易な日本語を使う外国の人にもわかりやすいメニューを目指しました。

### 点字メニュー

点字を使う視覚障害の人が利用できるように、お店のメニューを点字にしました。また、見える人もその内容がわかるように、墨字の上に点字シールを張り付けました。

### 音声メニュー

点字を使わない視覚障害の人でもメニューがわかるように、音声メニューを作りました。点字メニューに掲載しているQRコードをスマートフォンで読み込むと、メニューを音声で聞くことができます。はじめにジャンルごとのメニュー数を伝えることで、聞く人があらかじめ、総数をイメージできるようにしました。また、商品名でなく、番号でも覚えられるように、商品名の前に番号を振りました。

### 協力店舗 10店舗

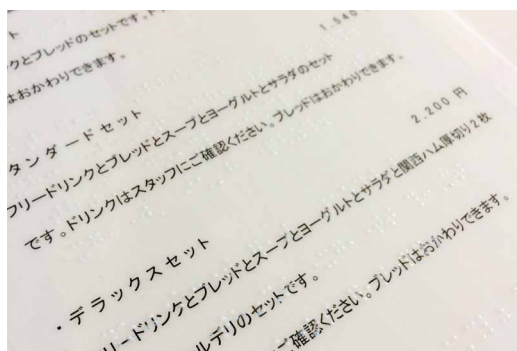
ほりかふえ、明治橋 あまな、THREE CAFE、Going Nuts!、食堂ヤポネシア、初雪食堂、市、Kolmio、ふな幸、万吾樓



やさしいメニュー (THREE CAFE)

### やさしいメニューの特徴

- 商品の写真を掲載
- 漢字にルビあり
- 読みやすいフォントを使用
- 説明文は分かち書き
- アレルギ表示 (特定原材料7品目) を掲載



店舗のメニューを点字に

## 2. 音声ガイド

展示作品の情報や、協力店舗の魅力を音声で聞くことができるようにしました。昨年度、制作した美保さんガイドが、今年度も大活躍。芸術祭の会場と協力店舗に美保さんガイドが利用できる案内板を設置しました。

### 「美保さんガイド」とは

「美保さんガイド」は展覧会に出展していた平野智之の作品に登場するキャラクター「美保さん」をぬいぐるみにした音声ガイドです。昨年の芸術祭において、平野との共働により制作しました。



昨年度に続き大活躍の美保さんガイド

## 3. 周辺マップ

芸術祭「ちかくのまち」の会場、バリアフリーメニュー設置店、休憩所、バス停、トイレなど、町のどこに何があるのかわかる周辺マップを作りました。手持ちサイズ、見やすいフォント、ピクトグラムを用いています。また、スマートフォンを持っている人は、マップに掲載しているQRコードを読み込むと、オンライン版のマップ上で、自分のいる位置を確認することができます。



安心して町をめぐるNO-MA周辺マップ

## 4. ルート案内動画

NO-MAの最寄り駅であるJR近江八幡駅からNO-MAまでの行き方の動画を作成して、NO-MAのホームページに掲載しました。地図が苦手な人やこれまでNO-MAに訪れたことがない人も、パソコンやスマートフォンがあれば歩いている目線で経路を確認できます。



ルート動画は現在もNO-MAホームページでご覧いただけます。





## バリアフリーメニュー等作成のプロセス

やさしいメニューや点字メニューなどのバリアフリーメニューは、地域にある店舗の方々に呼びかけるところからスタートしました。協力いただいた10店舗に、それぞれのお店の特徴を聞いたり、メニューの写真を提供してもらうなどして、一緒に作り上げました。



うどんやおでんがおいしい、市に設置したやさしいメニュー

### 1. 協力店舗を募集

近江八幡観光物産協会の会員、NO-MA周辺の店舗を対象に、バリアフリーメニューなどの作成への協力を呼びかけました。

### 2. 協力店舗との打ち合わせ

協力に応じてくださった店舗と打ち合わせを行いました。誰もが町歩きを楽しめるように、バリアフリーメニュー等を作成する取り組みを説明し、協力いただく際の流れやお互いの役割作業を確認しました。

### 3. 情報収集

協力店舗にメニューや写真素材を提供していただいたり、お店の基本情報やこだわりなどについて聞き取りを重ねました。



店舗の入り口にはメニュー看板と一緒に、音声ガイドの案内板が置かれました

### 4. メニューなどの作成

集めた情報をもとに、やさしいメニュー、点字メニュー、音声メニューを作成しました。同時に、お店を紹介する音声ガイドのテキストを作成したり、周辺マップに掲載する情報をまとめました。



NO-MAに設置された立体マップは、手で触れて、お店のおよその位置を把握することができます

### 5. メニューなどの設置

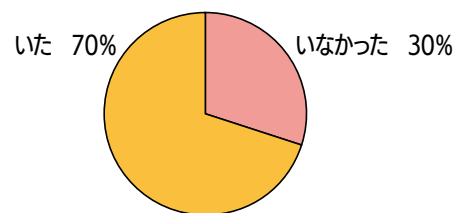
制作したバリアフリーメニューを各店舗に設置していただきました。芸術祭会期中、周辺マップと音声ガイドが聞ける案内板も設置させていただきました。また、バリアフリーメニューを活用し、一部の店舗を芸術祭の関連イベント会場にも使わせていただきました。



## 地域店舗の声

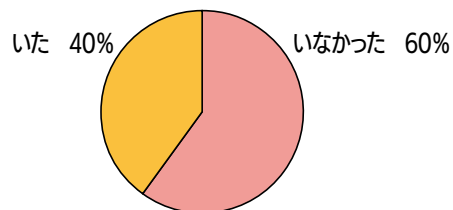
地域へのアクセシビリティの拡充を目指して行った取り組みが、どの程度活用されたのでしょうか。また、実施したことでのどのようなボーダレスが生じたのでしょうか。協力店舗の皆さんにアンケートに回答いただき、感想やご意見をお聞きしました。

### Q1. やさしいメニュー（写真付き）を利用されたお客様はいましたか？

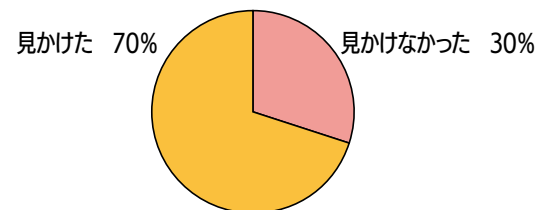


アンケート回答10店舗  
 ほりかふえ、明治橋 あまな、THREE CAFE、Going Nuts!、食堂ヤポネシア、初雪食堂、市、Kolmio、ふな幸、万吾樓

### Q2. 点字・音声メニューを利用されたお客様はいましたか？



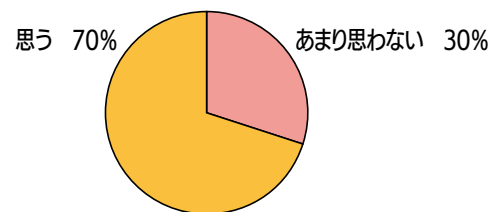
### Q3. 音声ガイド（美保さん）を利用されているお客様を見かけましたか？



### Q4. メニューについて困ったことはありましたか？

- 誰に渡していいかわからなかった 2
- どこに置けばいいかわからなかった 1
- 冊数が少なかった 0
- 忙しくて対応できなかった 0
- 利用者がなく使い勝手がわからなかった 0
- とくになし 1

### Q5. 障害のある方がお店に来やすくなったと思いますか？



### この取り組みを実施して感じたこと（一部抜粋）

「障害のある方が来られたときに対応できるので、**店として助かります**。対象の方が来れないのが残念でした」

「障害がある方がいらしたときの**対応を考える、よい機会をいただきました**」

「**店に来るまでの、誘導・介助がなければ**、障害のある方はなかなか来れないと思います」

「店としては、**今までの状態から一歩前進できた**ような気がします。これからも、このような機会があれば、どんどん参加していきたいと思います。普段から障害のある方がお店に来やすくなるように努力していきたいと思いました」

「今後も**多様性のある方々が集うステキなイベント**、よろしくお願いいたします!」

「私たちの**店舗は2階に上がらないといけない**ので、平地の方が入りやすいと思いました」

「メニューは写真もあり、**皆さんに説明しやすかった**です」

「**誰にもやさしいメニュー**でした」

「やさしいメニューは**ご年配の方にも人気**でした」





## コラム Column

作品や障害福祉に関する学びの機会を提供し、意見交換、交流の場を創出することを目的に開催されたポータル・エリア近江八幡アカデミーでも、地域へのアクセシビリティの拡充について講演しました。「福祉」「芸術」「地域」など様々な視点から掘り下げられたトークを一部ご紹介いたします。

### アクセシビリティとは何か？平面作品を視覚以外でいかに味わうか？

第1回 9月27日（日）二限目 ちかくのまちの歩き方より  
先生：佐倉武（社会福祉法人グロー 企画事業部主任自立生活支援員）  
石田瞳（社会福祉法人グロー 企画事業部自立生活支援員）

**佐倉** 「アクセシビリティ」ってなかなか馴染みがない言葉だと思います。一般的には高齢者や障害者などを含めて、あらゆる人がパソコンで情報を得られたり、サービスが受けやすかったりという意味で使われているのですが、この芸術祭においては、社会参加のしやすさという意味でも使っています。

**司会** アクセシビリティはスマートフォンにも付いている機能ですが、聞きなれない人もいますよね。

**佐倉** そうですね。スマホの機能でいえば、画面の文字を拡大したり、ボイスオーバー機能といいまして、画面の文字を読み上げることで目の見えない人の使い勝手をよくするような機能が活用されています。

**司会** 芸術祭において情報にアクセスしやすくすることは、展示の内容と同じくらい重要な取り組みとして、これまでも続けられてきました。福祉的な視点、アクセシビリティの視点がこの芸術祭でも生かされているわけですね。

**石田** 今年度の取り組みとして、鑑賞サポートツールを考案しました。昨年は粘土や木彫の作品を中心に、視覚以外を使った作品鑑賞を実践しましたが、今年度は、平面の作品を視覚以外の方法で味わうことを検討しました。

**司会** 粘土や木彫だと、形状があるので触って楽しむことができますよね。しかし、平面作品はどうしても触れない、触ってもわからないというハードルがあります。

**石田** 杉浦篤さんの写真の作品（P12参照）を鑑賞するために、しが盲ろう者友の会にご協力をいただき、当事者、支援者へのヒアリングを実施しました。

**司会** 盲ろう者とは、目（視覚）と耳（聴覚）両方に障害がある人ですね。どのようなやりとりがありましたか？

**石田** 杉浦さんの作品のレプリカを鑑賞していただきました。通訳介助者を通して、学芸員が作品情報を伝えたのですが、伝えたい内容がうまく伝わりませんでした。誰でもそうですが、体験したことがないことはイメージしづらいものです。写真を触り続けることで、写真が色褪せ、はげていく様子はなかなか伝わりませんでした。コロナ禍のなか、触れる展示は避けるべきではという考え方も当初はあったのですが、このヒアリングを受けて、実際、触って体感できるということが、作品鑑賞において、とても重要であると再確認したわけです。

### 鑑賞の可能性を広げる、鑑賞サポートツールの考案

第2回 10月25日（日）二限目 ちかくのまちづくりより  
先生：林ケイタ（株式会社デンキトンボ代表）  
安川雄基（合同会社アトリエカフエ代表）  
横井悠（NO-MA主任学芸員）

**司会** 今回、杉浦さんの制作を追体験する空間として、鑑賞の可能性を追求する鑑賞サポートツールが考案されました。展示台は安川さんに制作していただきましたが、どのような狙いがあったのでしょうか？

**安川** この展示で目指したのは、目の不自由な方に作品を楽しんでもらうこと、感じてもらうことです。様々なチャンネルから作品を楽しんでもらうため、視覚以外で鑑賞する仕掛けをいくつも作り、それらがひとまとめになった構造体を考え、この設置台ができました。アクリル容器の中には、写真に写っているような落ち葉や砂浜の砂が入っています。そこには、被写体の季節感だったり、場所性だったり、作品の雰囲気や少しだけでも感じてもらいたいという意図があります。落ち葉を触ってみると、カシャカシャと音がします。写真の中の世界を歩いているときの音のようです。砂浜の砂は、仲間に頼んで福井県の海岸まで取りに行ってもらいました。「できるだけ海の匂いがする砂を取ってきて」とお願いしたのですが、少しでもその場所の気配を感じてもらいたいと思って用意しました。

**司会** 視覚以外のいろいろな鑑賞方法を追求した展示台ということですね。一方、杉浦作品のもう一つの鑑賞として、映像を壁に映し出す技術を活用した鑑賞方法がありました。

**林** 単に映像が大きく壁に映し出されているというわけではありません。特別な非接触型の機械、リープモーションを使っています。中に小さなカメラが入っ

ていて、カメラが手の動きをキャッチして、写真を拡大縮小したり、次に進めたり、映像をコントロールすることができます。市販の機械ですが、プログラミングを書き加えることで、展示に活用することができました。

**司会** 制作にあたって、しが盲ろう者友の会にヒアリングしましたね。

**林** 初めてのことで驚きました。盲ろうの方にお会いして、どうやってコミュニケーションをとったのかかわかりませんでした。また、どうしたら私の作っている映像や音声を伝えられるかなど、様々なことを考えさせられました。

**安川** 私も驚きました。なぜ横井さんは写真を選んだのだろうと思いつつも、簡単に伝わらないことを伝えたいという熱意を感じました。私自身も、なんとかして伝えたいというモチベーションになりました。

**横井** これまでの展示より、もう少しチャレンジできるのではないかと考えて写真の作品を選んだんです。杉浦さん自身も、視覚だけで対象を捉えているのではないと思います。写っているものに思い入れを抱き、大切に感じ、持ち歩く。取り出して触れることで、さらに愛着が増していきます。杉浦さんのようなアプローチで生まれた作品を、目で見るだけでなく、様々な方法で感じることは、すごく意義深いと思いました。



## 盲ろうの人、視覚障害の人と楽しむ“ランチと芸術鑑賞会”

言葉では説明しにくい芸術作品の魅力を、視覚障害の人や盲ろうの人など、様々な障害のある人とともに味わうことを目的に開発した鑑賞サポートツール（P38 参照）を活用した鑑賞会を実施しました。また、近隣の店舗と共働で制作したバリアフリーメニューやマップを活用しながら、協力いただいた飲食店で食事をし、町で過ごす時間を楽しみました。



### 開催日時

第1回 9月30日(水) 11:30～14:00

ランチ会場：食堂ヤポネシア

参加者：10名(うち当事者2名)

第2回 10月9日(金) 11:30～14:00

ランチ会場：市

参加者：16名(うち当事者5名)

第3回 11月9日(月) 11:30～14:00

ランチ会場：初雪食堂

参加者：13名(うち当事者2名)

鑑賞会会場：NO-MA

対象者：盲ろうの人、視覚障害の人、この鑑賞会

に関心がある人



### 鑑賞会の特徴

#### 「鑑賞サポートツール」を活用した芸術鑑賞

「鑑賞サポートツール」(P38 参照) を活用して、目で見ること以外の方法で平面作品を鑑賞。

#### バリアフリーメニューがあるお店でのランチ

バリアフリーメニュー (P42 参照) を置いているお店でのランチ。

#### ゆっくりでわかりやすい作品解説

学芸員の作品解説は、通訳しやすいように、わかりやすい言葉を選び、ゆっくり簡潔に進めました。

#### 写真のミニワークショップ

思い出のつまった写真を、愛着をもって触れる杉浦作品に倣って、参加された盲ろうの人にも「思い出」を持ち帰っていただくこと、インスタントカメラを使ったミニワークショップを実施しました。当事者とその他の参加者もしくは通訳介助者でペアになり、ランチで1枚、芸術鑑賞会で1枚、盲ろうの人が主体となり写真を撮りました。盲ろうの人が撮った写真に写った情景を、見える人が説明し、ペアで写真にタイトルを付けました。タイトルや日付が見える人が写真に書き込み、最後の振り返りで写真を発表しました。







## アートをきっかけに いろんな感じ方をシェアしよう!

学芸員と「ちかくのまち」の会場を巡り、参加者同士で自由に作品の感想を話したり、様々な視点を共有する鑑賞会を実施しました。コースは、近江八幡コース（NO-M A、奥村家住宅）と安土コース（B&G 海洋センター、よしきりの池）の2種類を用意しましたが、安土コースは雨天のため中止となり、近江八幡コースには発達障害当事者の方4名を含む、10名の方にご参加いただきました。



### 開催日時

#### 安土コース

10月17日(土) 14:00 ~ 15:00  
※雨天のため中止

#### 近江八幡コース

11月22日(日) 13:45 ~ 15:30  
参加者: 10名(うち当事者4名)

会場: NO-MA、奥村家住宅(近江八幡コース)  
対象者: 発達障害の人、発達障害の傾向があると思う人、長い説明を聞くのが苦手な人、鑑賞会で意見を言うことに負担を感じる人、鑑賞会に関心がある人。



### 鑑賞会の特徴

#### 学芸員のわかりやすい作品解説

熟語や難しい表現は避けて、端的でわかりやすい解説を行いました。

#### やさしい作品ガイド

希望者には、作品の紹介文をわかりやすく表現した「やさしい作品ガイド」を配布して、作品を鑑賞してもらいました。

#### いろんな考えや感想をシェアできる振り返りの時間

自由に感想を話したり、様々な視点を共有できる時間を設けました。

ルールは3つ

- ①何を言ってもいい
- ②何も言わなくていい
- ③他の人の意見を否定しない

色のついた付箋に展示作品や鑑賞会の感想を書いてもらい、ボードに貼って共有しました。人前で発表するのが苦手な人は、紙に書くだけでもOK。すぐには考えがまとまらない人は、他の人の発言を聞くだけでもよいこととしました。

#### じっくり考えて回答できるオンラインアンケート

アンケートは、鑑賞会終了後、その場で記入してもらう従来の方式のほかに、じっくり考えて回答したい人のためにオンラインアンケートも用意しました。

#### ニックネームでの参加申込も可能

気軽に参加できるように、ニックネームでの申込みも可能としました。





## 鑑賞会で寄せられたアンケートの考察

盲ろうの人、視覚障害の人と楽しむ

“ランチと芸術鑑賞会”

作品を鑑賞するとき、

「正解を当てる」だけが目的ではありません

昨年度は、盲ろうの人と木彫の立体作品に触れる鑑賞会を行いました。鑑賞した作品は、触ることで形がわかりやすいものであったため、盲ろうの人がその形が何であるか正解を当てるような鑑賞方法となり、この方法だけでは、鑑賞の幅が限られてしまうことに気づきました。今年度の鑑賞会では、芸術作品をより深く味わうことができるように、鑑賞サポートツールを使い、杉浦篤の作品を鑑賞しました。

アンケートでは、鑑賞サポートツールの「アクリル容器に入った素材」がよかったという感想が多かった一方で、作品については盲ろうの人から「イメージしにくい」「難しい」「わからない」という感想が多く寄せられました。

盲ろうの人と芸術鑑賞を楽しむためには、主体的に鑑賞できる展示があることや制作体験できることが重要だと考えられます。具体的には、触感、素材感、匂いなど、様々な感覚で作品を体感できることが芸術鑑賞の充実につながると思います。

また、盲ろうの人が作品についてイメージできる体験を積み重ねられることも、芸術鑑賞をともに楽しむうえで重要であると推察されます。さらに、作品を鑑賞するとき、表現されている形やものが何であるか、わかることだけが目的ではありません。そのことを、通訳介助者と共有することで、「正解を当てる」だけではない芸術鑑賞に盲ろうの人が出会い、体験を積み重ねることができるのではないのでしょうか。

今回企画した鑑賞会や活用した鑑賞サポートツールは、盲ろうの人と作品を楽しむことを目的としていますが、盲ろうの人にとってだけでなく、触って鑑賞するという、鑑賞のあり方を広げることもつながりました。



アートをきっかけに いろんな感じ方をシェアしよう!

誰にとってもわかりやすい表現で、  
美術の魅力や奥深さを伝える試み

アンケートで、「作品解説がわかりやすかった」といった意見が多く寄せられました。当日の振り返りの時間でも、当事者から「わかりやすかった」という意見が多数あったことをみても、一般的な展示の説明文は、美術に馴染みがない人や専門用語を知らない人からすると、難しく感じているのかもしれない。

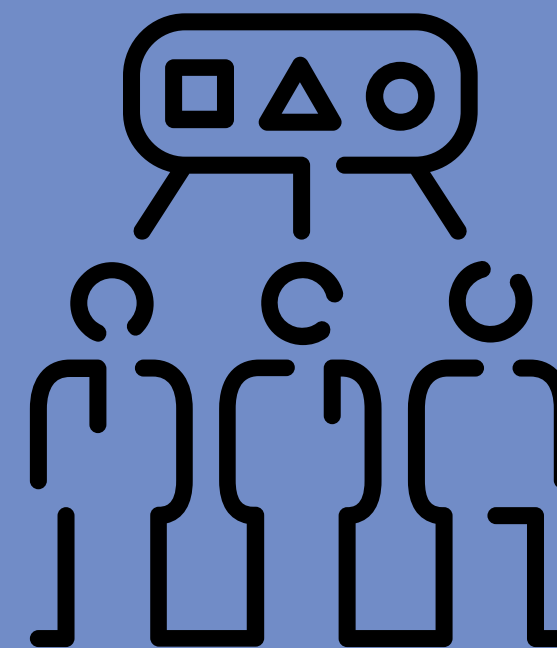
端的でわかりやすい言葉を使って、美術作品の魅力や奥深さを表現するのは難しいと推測されます。しかし、今回の鑑賞会では、わかりやすく伝えることに重点を置き、難しい熟語や専門用語は使用しないことにしました。当事者ではない参加者からも、「わかりやすかった」との感想をいただき、障害の有無に関係なく、誰にとってもわかりやすい解説となったことがわかりました。また、会場に掲示している作品紹介文を、やさしい表現で言い換えた作品ガイドの評価についても、半数以上が「よい」との評価でした。

昨年の鑑賞会のタイトルは「発達障害の人と楽しむ芸術鑑賞会」でした。しかし今回、参加対象として障害名は入れましたが、鑑賞会タイトルには「いろんな感じ方をシェアする」という特徴を掲げました。その方が、どんな鑑賞会であるのか発達障害の人にもわかりやすく、参加しやすいと考えたためです。日常生活では生きづらさに繋がることも多い捉え方や感覚の違いは、正解、不正解がない芸術鑑賞の場ではむしろ好ましさとして現れます。

一方、アンケート等では「わかりやすい作品解説」という特徴が特に好評であり、わかりやすい解説で鑑賞を楽しむということを前面に出した鑑賞会が望まれているとも考えられました。







カルチュラル・デモクラシーの  
実現に向けて

## 実施内容とねらい

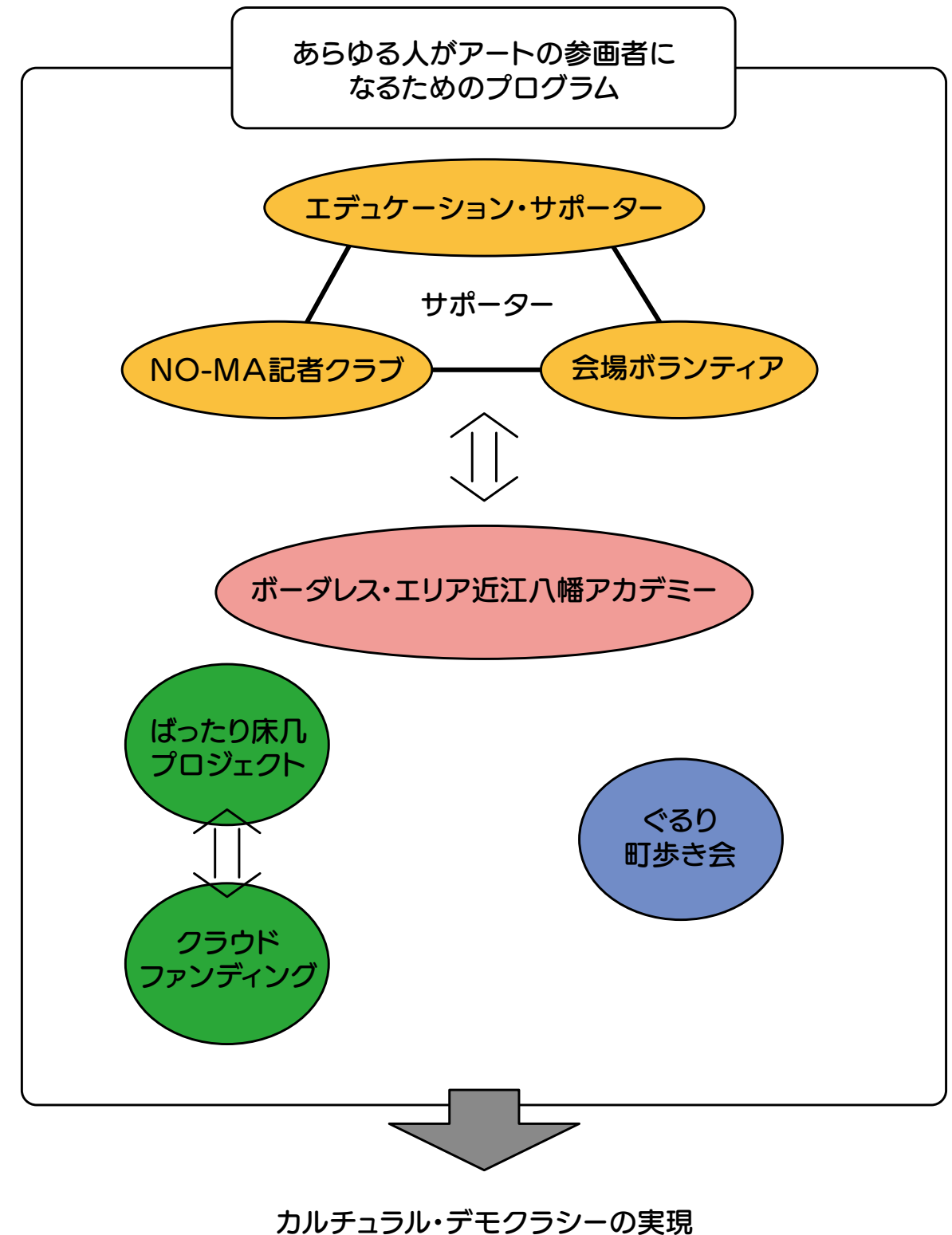
### 文化、芸術を創造したり、鑑賞しましょう

芸術祭では、プロジェクトの大きな目的の一つとして、カルチュラル・デモクラシーの実現を目指しました。カルチュラル・デモクラシーの実現は、日本語でいうなら「文化的民主性」の実現。すべての人が文化、芸術を創造したり、鑑賞したり、その方法を自分で選択できる状況にあることをいいます。特に高齢者や障害者、地域住民や地元事業者といった人たちに、このプロジェクトに参画してほしいという思いが込められています。

展示会場が複数になる芸術祭では、「会場ボランティア」の存在は欠かせません。そこから生まれる交流が地域の垣根を取り払い、会場ボランティア自身が作品をよく知り、伝えたいという思いを強く持つことで、カルチュラル・デモクラシーへとつながっていきます。自ら取材し情報を伝える「NO-MA記者クラブ」の活動も同じです。3年目を迎えた今年度は、コロナ禍で活動が制限されつつも、これまで以上に個性的で意欲にあふれた記事が書きあげられました。

今年度、新たに生まれた「エデュケーション・サポーター」は、アートを通じた学びの場、交流の場をファシリテートすることで、アートを介した地域交流の機会を生み出すことを目指しました。「学びたい」「知りたい」「伝えたい」という思いは、年齢や障害の有無に関わらず、誰もが持つものでしょう。活動を通じての気づきが、「ちかくのじかん」というイベントへとつながっていきます。

サポーターからの要望もあり実現した「ボーダレス・エリア近江八幡アカデミー」、障害のある人やアーティストと町を散策しながら鑑賞を楽しむ「ぐるり町歩き会」など、ちかくを刺激する企画やイベントが盛りだくさんとなりました。アートを楽しみたい、人と交流したいという思いを持つ人が集まり、芸術祭が形作られていったのです。







# アートと人の架け橋となる学びの場を企画

## エデュケーション・サポーターとは？

芸術祭と学びを繋げる企画を考え、そのファシリテーションを担当するサポーター活動です。参加者には、文化と教育に関心のある、20代から70代と、年齢層も立場もばらばらな10名が集まりました。

これまで芸術祭に参画したサポーターなど、多くの方と育まれた関係性を大事にしつつ、新たな活動の幅を広げるため、本年度はじめて行うことになったのが、エデュケーション・サポーターの活動です。この活動に参加するサポーターが、アートと人との架け橋となる役割を担えるような機会を創出することを目標としています。

会期中には4回の「エデュケーション・サポーター会議」を開催。美術教育の専門家のレクチャーを受けたり、企画立案のためのディスカッションを行い、これらの活動の成果として、11月21日に芸術祭「ちかくのまち」を舞台としたイベントを実施しました。



## 第1回エデュケーション・サポーター会議

日時：9月26日(土) 10:00 ~ 17:00  
場所：旧伴家住宅  
午前：レクチャー、NO-MAと奥村家住宅見学  
午後：安土エリア展示見学、グループワーク

初顔合わせとなった初回のエデュケーション・サポーター会議。まずは事業の趣旨と狙いを共有し、この取り組みのゴールをみんなで思い描きます。その後、「ちかくのまち」の展示を観て回りました。見学後は、2グループに分かれ、イベントのアイデア出し。ルールはとにかく批判せず、実現性を無視して、理想を語ること。各グループであふれ出たアイデアを全員で共有しました。



## 活動

エデュケーション・サポーター会議

- 第1回：9月26日(土)
- 第2回：10月3日(土)
- 第3回：10月24日(土)
- 第4回：11月7日(土)

イベント「ちかくのじかん」：11月21日(土)

ボーダレス・エリア近江八幡芸術祭「ちかくのまち」を舞台に、エデュケーション・サポーターが企画する学び・交流のひとつ

参加人数：10名

## 担当者コメント

初顔合わせにも関わらず、積極的な発言が多く出たのが印象的でした。参加者の皆さんからは、「アートを学びに繋げていきたい」という強いモチベーションを感じました。「批判NG。とにかく理想を語る」というフレームのもとで行ったグループワークでは、びっくりするような角度からの発想も飛び出し、皆さんの想像力に感嘆しました。学びに繋がるアイデアの種が集まったと思います。

エデュケーション・サポーター	
チームA	チームB
<p><b>キーワード</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>ハードルをあげすぎない</li> <li>子どもが展示に入っていける</li> <li>UDフォント分かりやすい文章</li> <li>作品に自由にアクセス</li> </ul> <p><b>役割</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>みんなで作り上げる</li> <li>NO-MA 安土間の距離が長い</li> <li>初見体験</li> <li>日常の行為</li> <li>自ら発信する</li> <li>行為がアートに</li> <li>行為がアートに</li> <li>途中を楽しく</li> </ul> <p><b>具体的なアイデア</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>紐で作って遊ぶ</li> <li>紐に書いて両の端に出る</li> <li>・材料、色?</li> <li>・どんな人でもできる</li> <li>・コマ野郎</li> <li>行為を組み重ねて</li> <li>紐がたてま</li> </ul>	<p><b>キーワード</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>柱とか石</li> <li>共通言語</li> <li>直接体験</li> <li>かかしや棚出しなど</li> <li>インスタ映え</li> </ul> <p><b>役割</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>体験的</li> <li>紐を繋ぐ行為</li> <li>下校中の小学生を呼び込みたい</li> <li>近江八幡の安土の距離</li> <li>もの見方の変革</li> <li>来た人が自発的に気取って表現できる</li> </ul> <p><b>具体的なアイデア</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>落ち葉の上に寝っ転がる</li> <li>見えない世界を体験する</li> <li>自然物(石など)で制作体験</li> <li>ひも振り</li> <li>スタンプラリー</li> <li>紐を絡ませる</li> <li>鳥糞・生糞</li> <li>行為を組み重ねて紐がたてま</li> </ul>

グループワークで出した意見をまとめた資料

## 第2回エデュケーション・サポーター会議

日時：10月3日(土) 10:00～17:00

場所：旧伴家住宅

午前：奥村高明氏(日本体育大学教授)によるレクチャー

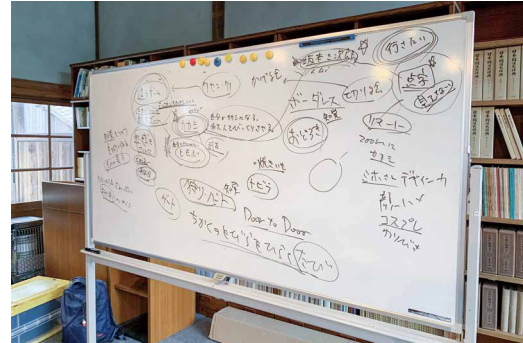
午後：企画会議(企画書作成に向けて)

午前中は、美術教育の専門家である奥村高明氏を講師に迎え、レクチャーを行いました。その内容を踏まえ、午後からは、前回の会議で蓄えられたアイデアのブラッシュアップを目的としたディスカッションを行いました。

ディスカッションの結果、アイデアは4つに絞られました。どれも興味深いアイデアであったのでこれ以上絞ることはせず、企画全体の構成を4つのアイデアに基づく体験が味わえるプログラムにしようとなりました。企画の大枠が見えたところで、この日は終了となりました。

### 担当者コメント

奥村さんによるレクチャーは、とても刺激的なものでした。美術教育というと、どこかしら教条的な印象を覚えますが、奥村さんによる捉えはもっと自由で、楽しみながら自発的な「学び」を促すようなものでした。このレクチャーは、今回の教育プログラム作りの重要な指針となったことと思います。午後からのディスカッションも熱を帯びました。「この作者の表現も、あの作者の表現も取り上げたい」、そんな思いから生まれた企画は4つ。いずれも、参加者が芸術祭に接して抱いた関心から広がったものです。頭をフル回転させたことによる疲労感と、企画が出来上がっていく充実感を感じた1日になりました。



## 第3回エデュケーション・サポーター会議

日時：10月24日(土) 10:00～17:00

場所：旧伴家住宅

午前：イベント全体のタイトルを決定

午後：企画会議(企画書作成の実施)

第3回となる会議は、教育プログラムのタイトル決めから始まりました。様々なキーワードが飛び交い、2時間をかけて決定したタイトルは、「ちかくのじかん」。「ちかくのまち」のエッセンスを入れ込みつつ、学びの「時間」を過ごしてほしいという思いから、この名前になりました。

午後の企画会議では、4グループに分かれ、詳細を詰めました。すべての企画のタイトルやコンセプト文などが決まり、1枚の企画書が出来上がりました。

### 担当者コメント

ざっくばらんにアイデアを出した1回目、レクチャーで得た知見を参考にアイデアの具体化を試みた2回目、そして、それを言葉にした3回目。これらのプロセスを丁寧に踏んで、企画書ができました。プログラムという言葉も固いので、それぞれの企画は、「体験」と呼ぶことに。どんな学びの場が生まれるか……プログラムの輪郭が見えたことにより、わくわくが共有されたと感じます。

ボーダレス・エリア近江八幡芸術祭 ちかくのまち関連イベント  
ちかくのじかん—芸術祭「ちかくのまち」にどっぷり浸れる4つの体験 企画書

1. 概要

(1) タイトル  
ちかくのじかん—芸術祭「ちかくのまち」にどっぷり浸れる4つの体験

(2) 趣旨  
「ちかくのまち」により深く浸れる「ちかくのじかん」を過ごしていただくイベント。芸術祭を舞台に、作者の表現形式に着想を得たものや、作品鑑賞を掘り下げるような4つの体験型の体験が盛り込まれる。それぞれの体験をおとす、普段とちがう感覚が広がる、あたりまえだったことが違って見える、エデュケーション・サポーターが提供するそんな「ちかくのじかん」を参加者に共有いただく。  
なお、4つのイベントを順に巡って、フルに楽しむツアーも開催。

実際の企画書(一部)

## 第4回エデュケーション・サポーター会議

日時：11月7日(土) 10:00～17:00

場所：旧伴家住宅

終日：企画の最終調整

イベント実施前の最終調整。「ちかくのじかん」を告知するチラシが出来上がりました。前回決まった4つの体験を実現するため、2週間後の本番に向けて最終的な準備段階。当日の動きや、必要な備品の割り出しなど、各グループが具体的な調整を行いました。

### 担当者コメント

チラシもでき、準備も大詰めです。企画立案から具体的な準備まで紆余曲折ありましたが、アイデアの種を芽吹かせていくプロセスを、みんなで経験していると実感しました。2週間後に控えた本番が一層楽しみとなりました。





# ちかくのじかん——芸術祭「ちかくのまち」に どっぷり浸れる4つの体験

ボーダレス・エリア近江八幡芸術祭「ちかくのまち」を舞台に  
エデュケーション・サポーターが企画する学び・交流のひとつ

4回のエデュケーション・サポーター会議を経て、企画された教育プログラム「ちかくのじかん」は、芸術祭「ちかくのまち」を舞台に、4つの教育プログラムを提供するイベントになりました。

日時：11月21日(土) 10:00～17:00

参加者：13名(ツアー参加者4名)



リード文より  
「ちかくのまち」に、より深く浸れる「ちかくのじかん」を過ごしていただくイベントです。芸術祭を舞台に、作者の表現様式に着想を得たものや、作品鑑賞を掘り下げるような4つの参画型の体験が繰り広げられます。それぞれの体験をとおして、普段と違う感覚が広がる、あたりまえだったことが違って見える、エデュケーション・サポーターが提供する、そんな「ちかくのじかん」を共有しませんか。

## 1の体験

### 「体をつかってひもアートで遊ぼう」

武友義樹の作品に関連し、参加者が自作のひもを制作して、それを振ってみます。ひもの素材や振り方によって視覚や触覚へ伝わる変化を体感しながら、武友の感じている世界の一端を覗くような体験です。



## 2の体験

### 「“見る・見ない”2人で作品鑑賞」

手作りの「美保さんアイマスク※」をすることで、見ることができる人と、見えない人のペアを作ります。“見る”人は、“見ない”人に、どう作品を伝えるのか。NO-MAと奥村家住宅の作品を鑑賞しました。“見ない”人は、視覚以外のあらゆる知覚を駆使して作品を感じ鑑賞する体験です。

※出展者の平野智之が描くキャラクター「美保さん」を基にして作ったアイマスク



## 3の体験

### 「カカシ? ヒト? ——カカシになりきり撮影会」

小西節雄の作品に関連し、衣装や小道具を用いてカカシに扮装し、作品に混じって写真撮影を行います。どちらがカカシで、どちらがヒトか、わからなくなるような非日常的瞬間を味わい、写真に残す体験です。



## 4の体験

### 「かってにアート—ひろって おいて かんじて」

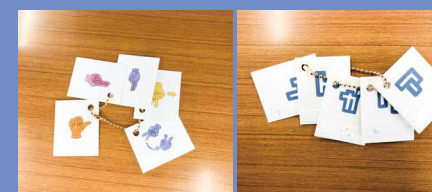
ちかくのモノ(流木、木っ端、石、落ち葉、草、どんぐりなどなど)をひろって、つかって、オブジェを作る体験です。出展者の坂本三次郎×椎原保に着想を得て、考え出されました。



## [PICK UP]

### 手話点字カードの「アリガトウ」

4つの体験とは別に考案され作られたのが「手話点字カード」です。カードの片面には、カタカナ文字とそれに対応する点字が打ってあります。裏面には同じ文字の指文字のイラストが描かれています。各体験に参加すると1枚もらえ、5枚集めると、「アリガトウ」という文字が完成します。



## 担当者コメント

4つの体験は、それぞれ「作者の表現から着想を得たもの」(1, 3, 4の体験)であったり、あるいは芸術祭が取り組む「情報保障に関する方針」を引き継いだもの(2の体験)であったりします。サポーター自身が、この芸術祭に接して感銘を受けたことがありました。それをいかにわかりやすく、楽しく、他の人に伝えるか。その結晶がイベント「ちかくのじかん」となりました。各体験に参加した人々の驚く顔や楽しげな表情が、サポーターにとっての成果となったはずで。



## 芸術祭や町の魅力取材して、自身の言葉で発信

### NO-MA記者クラブとは？

芸術祭「ちかくのまち」やその周辺地域の魅力について、広く、深く情報発信を担っていただく市民記者を募り、「NO-MA記者クラブ」を結成しました。

第1回編集会議は芸術祭初日に実施。取材や展示に関するレクチャーを行い、翌日から取材活動が始まりました。芸術祭の会場を歩き、作品に触れ取材を行い、近江八幡の魅力の探求、イベントへの参加など、活発な取材活動が繰り広げられました。会期中、日常的に記事が書き上げられ、10人の記者それぞれの視点から50本を超える記事が執筆されました。これらの記事を、Facebookで発信するとともに、「NO-MA記者クラブ TOPICS」として展示会場に掲示したり、来場者に配布したりしました。

会期終了後には、第2回編集会議を実施。活動を振り返るとともに、記事をまとめたニュースレター「ISHIN-DENSHIN」の制作に取り掛かりました。ニュースレターは3月に完成して、全国へ発送しました。市民記者ならではの自由な発想や、気づき、対象と向き合う真摯な姿勢が、あらゆる人がアートの参画者になることを目指すカルチュラル・デモクラシーの実現に向けての一助となったといえるでしょう。

活動期間：8月－12月

参加者数：10名

記事数：54本



### NO-MA記者クラブ PHOTO GALLERY

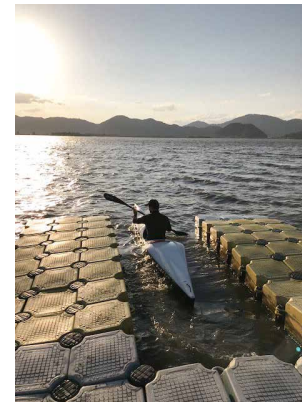


photo by 竹間義昭記者



photo by つじじゅん記者

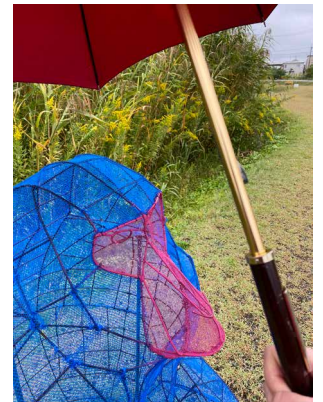


photo by 寺本ありさ記者



photo by 塚本悦子記者



photo by 田中純子記者



photo by 羽作家さおり記者



photo by 林初美記者



photo by 深田みどり記者



photo by 前田達慶記者



## 活動の記録

### 第1回編集会議

9月19日(土) 13:00-17:00

今年度の記者クラブメンバー10名で初顔合わせを行った後、アドバイザーである北村哲夫さん(京都新聞社)とニュースレターのデザイナーである竹岡寛文さん(株式会社タケコマイ)から、記事を書くコツや写真の撮り方についてのレクチャーを受け、魅力的な記事にする方法を学びました。その後、学芸員や出展作家から展示作品の見どころや鑑賞サポートの説明を聞き、取材するポイントを深めました。



第1回編集会議後に行われた作品レクチャーの様子

### 第2回編集会議

12月5日(土) 13:30-15:30

取材活動について振り返りを行い、取材中のエピソードや感想を共有しました。その内容を踏まえ、活動の成果をまとめるニュースレターの作成に向けた話し合いを行いました。企画展「ちかくのまち」を象徴する表紙の写真イメージを話し合ったり、それぞれの記事をわかりやすく、楽しく読んでいただくために、記事をどのように配置するかなど意見を出し合い、台割案を検討しました。校正を繰り返し、2021年3月、フリーペーパー「ISHIN-DENSHIN」が完成。全国の方に届けました。



### ISHIN-DENSHIN に寄せて

北村哲夫

(京都新聞メディア局長/NO-MA記者クラブアドバイザー)

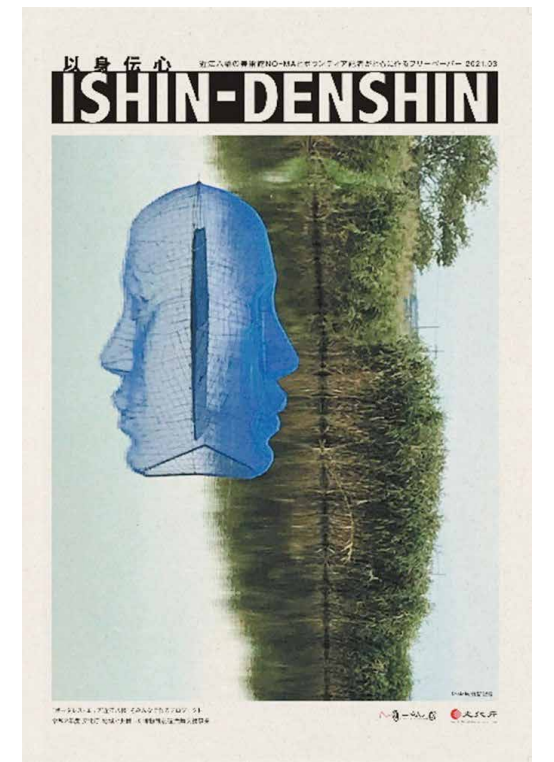
世界は大きく変わってしまった。新型コロナウイルス禍で社会生活は制限され、「ニューノーマル」という言葉が生まれた。経済への影響はもちろん、音楽や美術など文化への打撃も計り知れない。コミュニケーションの形もまた同じだ。「密」が警戒され、身近な言葉のやり取りさえ簡単ではない。

その中で、NO-MA記者クラブは3年目を迎えた。説明会を開くのもひと苦労の中、事務局は記者クラブ活動を実施するかどうかを悩んだという。当然のことだ。

しかし、価値ある3年目の活動だったと思う。NO-MA記者クラブは、市民記者が書いた記事と写真の主な表現方法として、小さな新聞のようなニュースレターという紙の形にたどりついた。SNSの活用も検討したうえで、記者たちの感動を伝える最も適切な媒体として選ばれたと言っている。

それはもちろん、新聞やネットのように何万という多くの人に届くわけではない。が、不特定多数ではなく、名前のある誰かから、名前のある誰かへ届くコミュニケーション本来の形を改めて思い出させるものだ。

人と人の距離が難しくなっている今、それは貴重な機会に違いない。企画展が「ちかくのまち」だったのも偶然とは思えない。この世界は当面続くのだろうが、私の感動をあなたに伝えたい、という願いと形こそ、NO-MA記者クラブの根底にあってほしいと思う。



フリーペーパー「ISHIN-DENSHIN」







# 人と人、人と作品をつなぎ、 地域の魅力を伝える大切な存在

## 会場ボランティアとは？

展覧会、芸術祭の運営を地域の力を借りて実施する取り組みは、2014年から続いています。2020年は新型コロナウイルスの影響があり、募集段階から様々な不安があるなかでのスタートとなりました。なかでも、人との接触が避けられる風潮のなか、参加者が集まるのかという大きな心配がありました。実際には想定を超える50名以上の応募があり（実際の活動は49名）、このボランティア活動が地域に根差していることの証明となりました。

参加者の内訳を見ると、例年は県外の方も全体の1割ほどいらっしゃいますが、今回は49名中48名が滋賀県にお住まいということで、県をまたいでの移動を避けることを余儀なくされた新型コロナウイルスの影響が感じられました。

年齢を見ると、60歳以上の方が32人と65%を超えました。社会の役に立ちたいと考えている方が多く、新型コロナウイルスの影響で旅行などに行けず、「時間を持て余していた」という声も聞かれました。「人と接することが体調を知るバロメータになる」という方もいました。

過去の会場ボランティアのアンケートなどを通じて、多くの方が、作品をより深く知り、展示や作家を理解して、来場者に伝えたいという思いを持っていることがわかっていました。今回、事前説明会を昨年の2倍となる4時間として、大型バスで全会場を巡り、学芸員や作家本人から作品の解説を聞く時間を設けました。エデュケーション・サポーター、NO-MA記者クラブとあわせて活動された方もいて、ボードレス・エリア近江八幡アカデミーにもたくさんの方が参加されました。カルチュラル・デモクラシーの実現に向けて、会場ボランティアに参加された方の高い意識が、大きな役割を果たしたといえるでしょう。

活動期間：2020年9月18日（金）  
～11月23日（月・祝）  
参加者：49名  
活動場所：NO-MA、  
奥村家住宅、  
近江八幡市安土B&G海洋センター内  
ふれあい施設

## 募集

新型コロナウイルスの感染拡大がやや落ち着いた7月中旬、募集を開始。7月末から8月にかけて、第2波と呼ばれた感染拡大があったのですが、8月21日の締め切り時点で予想を超える人数の応募がありました。感染症対策を徹底するなかで活動場所を増やすなどして、より多くの人に、長い期間活動していただきました。



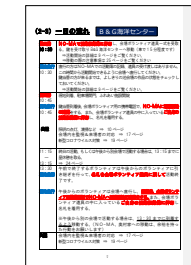
募集ちらし 表紙



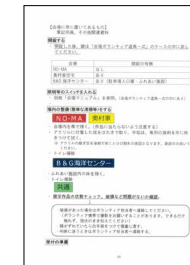
募集ちらし 中面

## マニュアル

事前説明会で配布したマニュアル。業務として「開錠、施錠」「作品の見回り」「消毒、換気」といった言葉が並びますが、一番大切な役割は「笑顔で来館者を迎え、人と人、人と作品や町を繋げる」こと。



活動の流れ



業務内容

## 事前説明会（※必ずどちらかに参加）

第1回

9月18日（金）

山田学芸員が作品を解説



第2回

9月19日（土）

横井主任学芸員が作品を解説





## 活動日誌

会場ボランティアの活動では、日誌を記録することで引継ぎ事項や思いを共有しました。最初のころは、「備品が足りない」「来客が少ない」といった事務的な伝達が主でしたが、次第に来場者との交流が活発になり、記録される言葉にも個性があふれるようになりました。直接出会うことがないボランティア同士でも、日誌を通じて共感が生まれました。そのなかから、ほんの一部をご紹介します。



9月19日(土) 奥村家住宅  
第1号は名古屋からの男性。自転車(レンタル)で。次は東京から男女。



9月22日(火) 安土B & G海洋センター  
2組の子ども連れの方が「2回目」と言って来てくれました。子どもがカカシを見たいと言うからまた来ると言っていました。



9月24日(木) NO-MA  
2階、展示台に置かれた美保さん人形を見て、「ウランちゃんに似ているね」と言われた方がいらっしゃいました。ほっこりしました。

9月24日(木) 安土B & G海洋センター  
9月21日のボランティアの方、ありがとうございます。よく気が付いてくれました。スタッフ用の履物がほしかったんですよ。お客様が来られてもすぐ外へ出ていけますもの。大活躍です!



10月2日(金) 奥村家住宅  
鮎万里絵さんの作品は私も大ファンですが、今回は谷澤さんとのコラボで今までと違った作品で感動しました。

10月2日(金) 安土B & G海洋センター  
よしきりの池沿道を散歩される女性が「何かやっているの?」と聞かれたので、「芸術祭を催しているので、ご覧ください」と案内させていただきました。



10月3日(土) 安土B & G海洋センター  
釣りをしに来られた方が、陶器の作品に興味を持って見てくださいました。

10月7日(水) 奥村家住宅  
午後、耳の不自由な方が来られました。筆記案内を行いました。充分な案内とはなりません。手話の案内の方がおられたらなあ、と。

10月14日(水) NO-MA  
「作者の案内板の足のシールは何ですか」と聞かれたので、美保さん人形の事をお話して、「1階で貸し出しているのでぜひ」と案内させてもらったら、早速使ってくださいました。



10月15日(木) NO-MA  
「東京から来た」という女性。「心が安らぎますね、ここは」と作品を見ていかれました。また来てほしいですね。

10月16日(金) 奥村家住宅  
男女で来られた方、庭に出られて「すごーい!」「鮎さん、いい!」と楽しんでおられました。こちらもうれしくなります。

10月20日(火) NO-MA  
平野さんの目の描き方、よく見るとおもしろい。私が生息するSNS上では見覚えのない描かれ方。これは平野さんの描き方が独特なのか、それとも私のSNSのタイムラインが二次元に偏っているせいなのだろうか。



10月25日(日) 奥村家住宅  
ぱったり床几が気に入った女子2人、すべての床几に座りたいとのことで、6カ所を目指すとのこと。ぱったり床几プロジェクト、活用されてます。

(P.74 へつづく)



10月30日(金) NO-MA

1階のヤマガミさんの映像について一言。東京駅の風景、今は少し(あの作品と)変わってるんですね。ホーム内の車両(E231系500番代)です。山手線から中央・総武線にほぼ全車変わったそうで、東京駅に入線することは、たぶんなくなったようです。

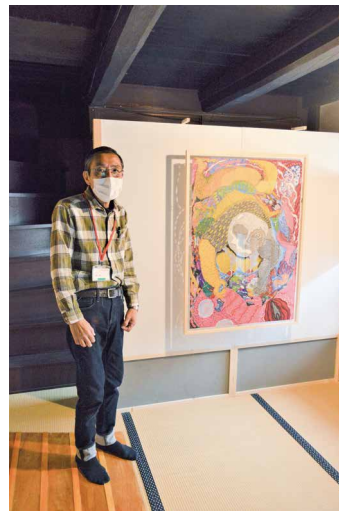


11月1日(日) 安土B&G海洋センター

14～15時ごろ6組21名が来られ、対応に追われました。皆さんの感想は「カカシに驚き、十分に堪能した」と言っていました。

11月3日(火) NO-MA

ボランティアのHさんが作品を説明されているのを聞いて、私も勉強になりました。後から来られた方に少し話をしたら、とても熱心にヒラトモさんの作品を見ていただきました。



11月4日(水) NO-MA

学生の男子2人、「彼(武友さん)はなぜ紐を振っているんでしょう?」という素朴な質問。「本人でないとはわかりませんが、本人にとって大切な物や、大事な行為なのではないでしょうか」と答えました。

11月5日(木) 安土B&G海洋センター

バイクで釣りに来た男性。「池の周りの武友さんの作品がよい!」「池の顔もよい。あのまま置いておくと、コイの産卵場にええなあ」とのこと。釣れなかったそうです。



11月7日(土) 奥村家住宅

「会場ボランティア活動日誌」いつも楽しく読ませてもらっています。特にTさんの文章は楽しい。読み応えがあります。他にもいろいろ参考になることが多いです。

11月7日(土) 安土B&G海洋センター

ご近所の方が3世代(おばあちゃん、お母さん、お孫さん)で来られました。2回目だとおっしゃって、楽しそうに見て回ってくださり、うれしかったです。

11月12日(木) NO-MA

武友さんの施設の職員の方が来館。彼の日常などをお聞きし、武友さんが身近に感じられました。

11月17日(火) 安土B&G海洋センター

男性の2人連れの方は、展覧会を開催していることをご存じなく偶然来られ、いろいろ関心を持ってくださいました。そういったとき、お渡しするパンフレットを少し補充してください。

11月19日(木) 奥村家住宅

男女の2人組、女性は鮎さんの大ファンとのこと。「立体的なものもすごくすてき」「切り込みが入っているのは、本当に新しい作品ですね」とも。作品の感想が聞けて、とてもうれしかったです。

11月21日(土) 安土B&G海洋センター

私の活動は今日で最後ですが、いろいろ感じた2か月でした。雨の日にはカカシのおしゃべりが聞こえてきそうな気配を感じ、坂本×椎原さんの作品が撤去されて大変残念に思ったり、美術館の裏側も少し垣間見えておもしろかったです。ありがとうございました。

11月23日(月) NO-MA

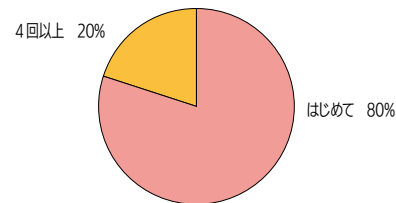
本日千秋楽を迎えました。今回も多くの出会いがあり、皆さんりの楽しみ方を感じました。次回開催時にはコロナが終息していますように。



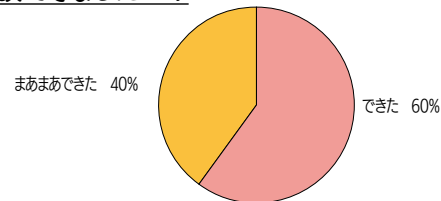


# アンケート エデュケーション・サポーター

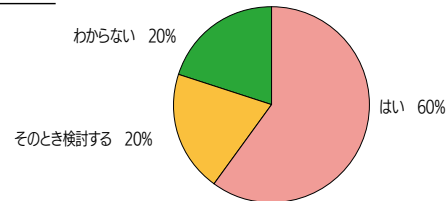
## Q1. サポーターへの参加は何回目?



## Q3. 活動を通じて学びや交流の場作りを体験できましたか?



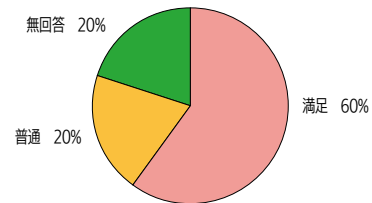
## Q5. 同じような活動があったら、また参加したいですか?



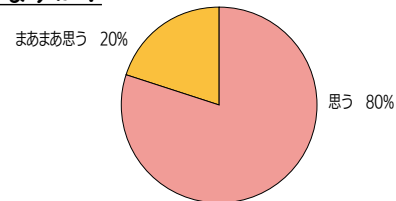
## Q6. 活動中印象に残ったことは?

- ブレインストーミングをするのが初めてで、とても印象的で楽しかった。昼食タイムに自然と交流が生まれる時間も楽しかったし、互いの理解を深める重要な時間だったと思う。
- いろいろな年齢の人と語り合い、だんだん形になっていったときの楽しさ、参加してよかったと思いました。イベントを広報することは難しいとよくわかったのですが、今度は広報にもチャレンジしてみたいです。
- 今回のような活動、あるいはそれを種の一つとして咲かせるような活動が、ボーダレスに世界各地で多発すること願っている。私もその一翼を担いたい。

## Q2. 今回の活動の満足度は?



## Q4. 今回の経験は今後の活動に活かせると思いますか?



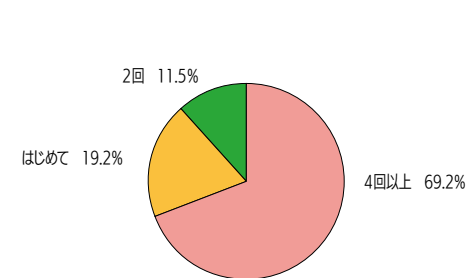
## Q7. 今後、こんなプロジェクトだったら参加したいなと思うことは?

- サポーターのなかには特技や専門知識を持っている人もいと思うので、いくつかの特技を組み合わせるプロジェクトを作るのもおもしろそう。
- 作家と一緒に、最初の話し合いの段階から参加して、単なるお手伝いではなく、アートを作っていきたい。作家と時間を共有したい。
- もう少し会期の早い時期にイベント本番を実施して、その成果をその後の来場者にも見てもらえるようにしたかった。人権侵害の恐れのない限りにおいて、最大限の表現の自由が許容される場を作りたい。



# アンケート 会場ボランティア

## Q1. サポーターへの参加は何回目?



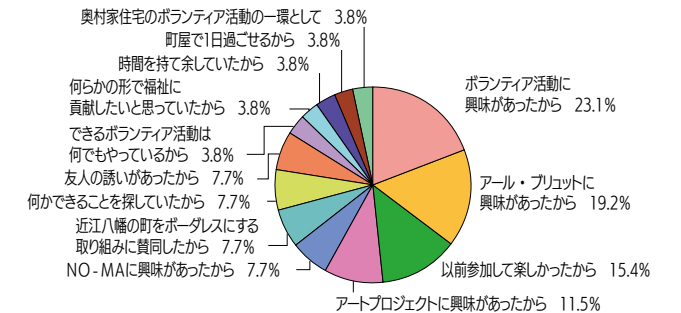
## Q3. 参加してよかったことは? (複数回答可)

- 芸術に触れることができた 76.9%
- ボランティアとして奉仕活動に参加することができた 50%
- 来場した人との触れ合いがあった 50%
- サポーター同士で交流があった 50%
- 障害のある人について少し知ることができた 46.2%
- 近江八幡の町の魅力に触れることができた 34.6%
- 心地よい空間にいられた 34.6%
- 自分が感動したり知ったことを他者に伝えられた 30.8%
- 謝金がもらえた 30.8%
- 新しい楽しみを見つけたことができた 11.5%
- 暇つぶしになった 7.7%
- いつも展示が楽しい 3.8%
- 障害がある方の芸術の才能に触れることができてとてもよかった 3.8%
- 芸術作品に触れることで感性が少し磨かれた気がする 3.8%
- よい社会勉強になった 3.8%

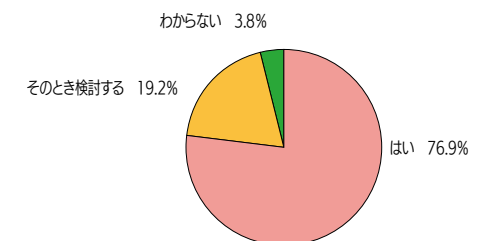
## Q5. 活動中印象に残ったことは?

- 作品のすばらしさには非常に感心しました。また、会場設定に相当パワーをかけていること、そして、近江八幡の旧市街地、建物にも感心しました。
- ボランティアと記者クラブの活動を通して、アートや障害のことをより深く考えることができ、とても貴重な時間となりました。
- ①一期一会の出会いが多数あり。②質問の意図に、的確な説明ができたかどうか?今も悩む。③感性の乏しさを痛感し、先の人生の目標ができた。
- 比較的平凡な人生を送ってきて老境に入り、「アール・ブリュット」に巡り会えたのは驚きでした。「生のまま」「ありのまま」が充分芸術になり得ることがわかりました。自分の残余の人生も、背伸びせず「ありのまま」に送ることを決心させられました。

## Q2. 参加しようと思ったきっかけは? (回答は1つだけ)



## Q4. 同じような活動があったら、また参加したいですか?



## Q6. 今後、こんなプロジェクトだったら参加したいなと思うことは?

- 子どもたちが楽しく感じる企画があったらいい。
- より多くの人に芸術祭を知ってもらい、参加してもらうためにはどうしたらいいかという検討会議を通年で開催してもいいのではないだろうか。
- 昨年やったキュレーションサポーターにまた参加したい。
- 全国、海外へとアール・ブリュットを広めていきたい。
- (町屋などの会場だけでなく) 町のあちこちに作品があったりすると、町を巡りながら観賞できておもしろいと思う。





# サポーター活動報告会

“ボーダレス・エリア近江八幡”をみんなで作るプロジェクトは、その名のとおり、募集に応じて参加していただいたサポーターの皆さんで作上げた芸術祭となりました。3種類のサポーターすべてに参加した人もいましたが、それぞれの活動が交わる瞬間はあまりなく、すべての活動が終了した12月24日、活動報告会を実施して、それぞれの活動を共有しました。それぞれが活動を熱く振り返る会となり、最後は、その思いを未来へとつなげるよう、白い凧にアイデアを描いて全員で掲げました。

開催日時：12月24日（木）  
会場：近江八幡市文化会館 小ホール  
参加者：10名



## エデュケーション・サポーターの振り返り

武友さんが紐を振っている映像を見て、この体験を皆さんにもしてもらいたいと考えました。布であったり、紙であったり、ビニールであったり、いろいろなロープや紐を作って、振ったらどんな感じになるか試しました。あまり重いと振るのが難しいとか、紐に装飾を施そうとか、音がするといいなと鈴をつけてみたり。そういった作業は楽しかったです。

本当に何かにこだわっていくという活動で、試行錯誤することがすごく楽しかったです。当日は小さな子どもさんが来てくれて、すごく楽しかったです。



小西さんのカカシの作品が一番心に返ることができました。企画としてうまくまとめられなかったとき、実際、小西さんにお会いしてみようとなりました。ご自宅に伺ったら、大きな倉庫にカカシがずらりと整理されていて、本当にサービス精神旺盛な方でした。私も小西さんのことが大好きになりました。熱い思いをそのまま、会場に持て帰ることができたと思います。

## NO-MA記者クラブの振り返り

私は元アートや言葉を綴るということにも興味があり、そして、福祉とか、ボーダレスということにも興味がありました。それらすべてが兼ね備わったボランティアということで、この秋の主たる活動にしようと思い参加しました。よしぎりの池に行ったとき、ラッキーなことに作家の椎原さんがいて、どういふスタンスで作品を作っているか聞くチャンスがありました。そこで作品を見る視点をいただけたような気がします。

今回はたまたまおもしろい写真が撮れました。近江八幡旧市街の会場より、安土の会場の方がおもしろい気がして、西の湖に行く機会が多くありました。西の湖を会場にしたことは最高によかったと思います。

記事にするため、作家さんがどういふ人が調べてから作品を見たのですが、そうすると、何か二度と戻れないところに入ってしまうと感じました。何も知らずに作品を見ると、作家さんのことを知ってから見るのでは違うのではないか。そういったことを考え、記事にしました。



## 会場ボランティアの振り返り



庭だけ見て帰った人がいたときは、本当に目が点になりました。この日は関西文化の日で無料ということもあったのですが、だから仕方がないではなくて、どう興味を持ってもらうかですよね。もっと見やすいところに作品を置いて味わってもらうとか、広報活動に力を入れて作品を知ってもらうとか、そういうことかなと思います。

私はすごく人見知りなんです。だから、ボランティア活動をしてきたのですが、今回で6回目になります。この活動は長い人生におけるヒントを与えてくれるような気がします。お客さんが来たときに、常に心から「いらっしゃいませ」という一言が出ないといけない。それが体調のパロメータになるんです。

会場ボランティアの方たちは、楽しいというか、ちょっとお客様がこられない時間におしゃべりすることもあるのですが、そうすると皆さんすごく充実した生活をされているんです。そのお話を聞くのも楽しみの一つでした。

お客様に作品を丁寧に見てもらいたいと思っています。そういう気持ちで自分の知っている限りの知識をお客様と共有する気持ちが大事だと思います。私自身ボランティアガイドもやらせてもらっているなかで、おもてなしの心を一番においています。お客様が大事です。

## ワークショップ「文字模似の凧」

活動のなかで感じた「もっとたくさんの人に見てもらいたい、知ってもらいたい」という思いを実現するため、アイデアを描きました。この凧は、事務局の天井に吊るされています。





## ぐるり町歩き会

### 障害のある人、アーティスト、地域住民の皆さんで、 旧市街の町並みをぐるり満喫

今回の芸術祭で実施されたぐるり町歩き会は、とても刺激的なイベントになりました。

第1回の「無視覚流でめぐる!ぐるり町歩き会」は、その名のとおり、参加者もアイマスクをして町を歩いたり、支える人になったり、五感をフルに活用した企画でした。講師としてお招きした国立民族学博物館准教授の広瀬浩二郎さんは、視覚障害の当事者です。広瀬さんが慣れた様子でお堀の石畳をスタスタと歩く姿を尻目に、参加者はおっかなびっくり、そろりそろりと歩きながら、無視覚流を体験しました。

第2回は、東京から作家の平野智之さんと支援員の朝比奈益代さんがお越しくださいました。NO-MAの展示を平野さんが、独特の語り口で解説してくれるという、とても貴重で、楽しい時間。参加者みんなで美保さんガイドを首からさげて、旧市街地を歩きました。この様子は朝比奈さんがアップしてくれたブログを転用して、P82で詳しくお伝えします。



足裏の感覚、聞こえてくる音、漂うにおい……五感を使っ  
ての町歩きです



番外編として広瀬先生を囲んで喫茶タイムを楽しみました



大活躍の美保さんガイドは、平野さんも大のお気に入りです

### 第1回 「無視覚流でめぐる!ぐるり町歩き会」

10月18日(日)

講師：広瀬浩二郎(国立民族学博物館グローバル現象研究部 准教授)

参加者：午前の会9名/午後の会8名

“無視覚流”での作品鑑賞では、作品についての説明が人によって異なり、選択した言葉によって受ける印象が違うことに気がつく、学びの多い時間となりました。初めて出会った者同士のペアも、情報のやり取りを通じて次第に距離が縮まり、会話が弾んだようです。「周辺マップ」や「美保さんガイド」を活用する機会にもなりました。視覚障害の有無に関わらず、誰もが安心して楽しめる時間でした。



### 第2回 「ヒラトモさんとめぐる!ぐるり町歩き会」

11月1日(日)

講師：平野智之 ※通称「ヒラトモさん」(展覧会出展者)、朝比奈益代(クラフト工房 La Mano)

参加者：16名

「ヒラトモ節」は、聞く人を幸せにする力があるようです。平野さんがうれしそうに発するひとこと、ひとことを、参加者は逃すまいと耳を傾けていました。NO-MAと奥村家住宅の作品を丁寧に解説してくれた平野さん。ご本人にとってもとても充実した時間になったようです。参加者からも、「とても楽しかった」という声が聞かれました。





## ヒラトモさんとめぐる!ぐるり町歩き会

今年もヒラトモ(平野智之)さんが、近江八幡にやってきました!昨年は美保さんガイドの開発など、様々な共働がありました。今年は、ヒラトモさんが通う「クラフト工房 La Mano」の支援員である朝比奈益代さんとともに、ぐるり町歩き会の講師としてお招きしました。朝比奈さんがブログにアップされた当日の様子を、お届けします。(11月9日にアップされた内容を一部抜粋して掲載しています)

文 朝比奈益代(クラフト工房 La Mano)



11月1日(日)  
小春日和の散策にはうってつけの日、「ボーダレス・エリア近江八幡芸術祭 ちかくのまち」関連イベント、「ヒラトモさんとめぐる!ぐるり町歩き会」が行われました。参加者のみなさんと一緒に、展示会場や町中を美保さんガイドをお供に巡りました。

ヒラトモワールドによるこそ!

このイベントの依頼を受けたのは、緊急事態宣言解除後、一旦押さえ込まれたコロナ感染者数が徐々に増えてきた7月中旬。世の中はまだまだ先の見えない不安の中。ご両親や La Mano スタッフも依頼をお受けするのは慎重な気持ちでしたが、ヒラトモさんのイベントをやりたいという強い気持ちを尊重して、開催日の2週間前に最終判断をすることを決め、開催に向けた準備が始まりました。

実はヒラトモさん、コロナウイルスをととても怖がっており、大好きな公共の乗り物に乗ることも控えていたほど。そんな怖い気持ちを克服して、近江八幡のボーダレス・アートミュージアムNO-MAにやってきました。

イベント開始時間10時30分前に本日の主役ヒラトモさんが登場、マスクにフェイスシールドを装着。フェイスシールドはコロナの不安を解消するためにご家庭でご用意いただいたもの。もし、息苦しかったり話しにくかったりしたらつけなくてもいいことを事前に提案していたのですが、やはり不安があったのでしょうか。

でも、館内で話が乗ってきたらじゃまになったのかフェイスシールドは外し、その後の町歩きではフェイスシールドをつけるというマイルールを決めたようでした。どちらかというと逆のような…。コロナ対策バッチリのヒラトモさんでした!

みんなで自己紹介をし、ヒラトモさんの作品のキャラクター美保さんがぬいぐるみ型の音声ガイドになった「美保さんガイド」を首から提げ、まずは館内の作品巡りが始まりました。



さっそくヒラトモさんは案内パネルの土足(靴のこと)マークに美保さんの土足をタッチ!! 神妙な顔つきで音声ガイドを聴いている模様。昨年のボーダレス・エリア近江八幡芸術祭「ちかくのたび」以来、美保さんガイド効果で他の作家さんの展示に興味を持つようになったヒラトモさん。以前は自分の作品しか興味がなかったのですが、美保さんガイドによって自分とは違う表現世界への扉が開いたのでした。美保さんガイドの恩恵を一番受けたのは、実はヒラトモさんだったのです。

一階のヤマガミユキヒロさんの作品をととても気に入ったヒラトモさん。それは鉛筆で描かれた風景画に実際の映像が重なる幻想



的な作品。額装された鉛筆画から、一日の光の移り変わりや行き交う人々、電車の発着などの日常の風景があふれ出し、映画のワンシーンのようにイメージが膨らみます。ヒラトモさんは「新宿だな」「自分の影を見てごらん」とじっくり眺めていました。



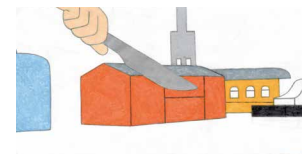
二階には、昨年の「ちかくのたび」に出展されたヒラトモさんの作品が凝縮されて展示されていました。ヒラトモさんが近江八幡を観光して制作した作品もあります。一際目を引くのは、美保さんの実物大パネル!!ヒラトモさんは「フルコースだよ」と大喜び。早速自分の作品を解説します。

そのうち畳の上に持参したフランス料理の写真と貨物列車の写真の切り抜きを並べ、フランス料理の写真の裏に、対応する貨物列車の切り抜きをセロテープで貼り

しました。後日聞いたら「ヒラトモの出番が来ると、なんだか緊張するのよ」と、緊張を和らげるためにお客さんに喜んでもらおうと事前に準備していたのでした。貨物列車はヒラトモさんにとってフランス料理のイメージで、「グルメ列車」と呼んでいる、列車がフランス料理になってる場面が作品に登場しているのです。



写真をみんなにプレゼントし「大成功だ!」とご満悦。これで緊張も解けましたね。



みなさん「すごいものをもらった」と少々戸惑いながらも喜んでくださいました。レアですよ～

次に訪れたのは、すぐ近くの会場「奥村家住宅」。ヒラトモさんは、早速美保さんガイドにタッチ! 「米田さんのも聞いてみよう」「確かに聞きましたよね」渦

巻模様が集積された陶器作品を見て「中華麺の柄」とユニークなコメント。座敷に上がる時は「お座敷から脱ぎ侵入」とヒラトモ節が炸裂。じっくり作品を鑑賞するヒラトモさん。鮎万里絵さんの作品を見て「お昼過ぎの出来事、一人はここで見ていたんだ」と詩的なコメントも。作品からイメージを膨らませていますね。鑑賞するヒラトモさんを見て、改めて美保さんガイドに感謝。参加者の皆さんも美保さんガイドを首から下げてくださり、さながら美保さんツアーのようです。



その後は、美保さんガイドの案内板が店頭においてあるお店を巡りながら、お堀の方に向かいます。町屋が点在する町並みを歩きながら「昔ながらのエピソードかも」と昔話が大好きなヒラトモさんは楽しそう。クレープ屋さんや食堂のガイドを聞き、お堀を散策。たくさん歩いてお腹が空いてきたころ、おいしそうな近江牛のコロッケ屋さんが見えました。「コロッケ食べませんか」とのスタッフの提案も「まだ早い」と一蹴。町歩き会が終わるまではお預けと、ストイックなヒラトモさんでした。ヴォーリズ建築の近江八幡教会を見学させていただき、同じくヴォーリズ建築の素敵な建物の中にあるナツ屋さんでお買い物を楽しみ、記念の集合写真を撮って、楽しかったイベントの幕を閉じました。



ヒラトモさんを先頭に美保さんガイドを首から下げた人々が、近江八幡の町なかを巡り歩く。美保さんガイドのアテンドで、ヒラトモさんとみんなで創ったパラレルワールドを遊ぶツアー。いつもの近江八幡と違う「ちかくのまち」に出会えたひと時でした。





## ボードレス・エリア近江八幡アカデミー

作品や障害福祉に関する知識などについて学んだり、意見交換したりする場の創出を目的として、ボードレス・エリア近江八幡アカデミーを開講しました。講師は、アーティストや学芸員、鑑賞サポートツールの制作に関わった関係者など、さまざま。コロナ禍での開催ということもあり、YouTubeでのライブ配信も行いました。

### 第1回 9月27日(日)

参加者数：22名 (YouTubeライブ視聴66回)

一限目 ボードレスを楽しもう、“ちかくのまち”を観光案内

先生：横井悠 (NO-MA主任学芸員)

山田創 (NO-MA学芸員)

二限目 ちかくのまちの歩き方

先生：佐倉武 (社会福祉法人グロー 企画事業部主任自立生活支援員)

石田瞳 (社会福祉法人グロー 企画事業部自立生活支援員)

三限目 ボードレスの生ずるところ

先生：今井祝雄 (美術家・成安造形大学名誉教授)

田端一恵 (社会福祉法人グロー 企画事業部長)

二限目の様子はP46で詳しくご覧いただけます。



### 第2回 10月25日(日)

参加者数：15名 (YouTubeライブ視聴71回)

一限目 障害のある人と作品を作る～武友義樹×福留麻里の共働

先生：福留麻里 (ダンサー、本展出展者)

西川賢司 (社会福祉法人グロー 企画事業部文化芸術推進課長)

二限目 ちかくのまちづくり

先生：林ケイタ (株式会社デンキトンボ代表)

安川雄基 (合同会社アトリエカフエ代表)

横井悠 (NO-MA主任学芸員)

三限目 ザ・ノンテマ・ディスカッション!

その場にいるみんなでディスカッションしました。

一限目の様子はP26で、二限目の様子はP47で詳しくご覧いただけます。



## ぱったり床几プロジェクト、クラウドファンディング

### ぱったり床几プロジェクト

ぱったり床几とは、“ぱったり”と収納できるベンチのことです。かつて近江八幡の家先で見られ、床几の上に売りものを並べたり、近所の人と談笑したり、交流を生む場になっていました。昨年の芸術祭で地元事業者の協賛を得て、旧市街に8基を設置。今年度は安土エリアを含めて、さらに5基を設置しました。



### クラウドファンディング

昨年度、地元事業者の協賛を得たぱったり床几プロジェクトでしたが、今年度は新型コロナウイルスにより地域でも厳しい影響が出ているなか、クラウドファンディングにより幅広く、プロジェクトの共同参画者を募りました。集まった資金は地域のなかにアクセシビリティを広げていく取り組みに活用させていただきました。

支援者：21名

協賛金：207,000円

(手数料27,354円を差し引いた179,646円が協賛金となりました)





## コラム Column

### ボーダレスと感染症

#### ～コロナ禍でプロジェクトが実施されるまで～

2020年、新型コロナウイルスの感染拡大により、これまで経験したことがない出来事がたくさん起こりました。メディアから流れてくる言葉は、「密を避ける」「ステイホーム」、「大きな声でしゃべらない」など。日本だけでなく、世界中が息をひそめて家にこもり、元気をなくしてしまったようでした。

3月24日、東京オリンピック・パラリンピックの延期が決まり、4月16日には全国を対象とした緊急事態宣言が発令されました。そんななか、“ボーダレス・エリア近江八幡”をみんなで作るプロジェクトはスタートしました。ボーダレス・アートミュージアムNO-MAは4月23日から5月11日まで臨時休館。緊急事態宣言解除後も、来場者が数人という日があり、芸術祭そのものの開催が危ぶまれた時期もありました。

#### 余儀なくされた実施内容の変更

この時期に繰り返されたミーティングでは、緩やかに感染拡大が収まるという見通しを立てつつも、6月30日をもって各事業の実施を判断するとしていました。実際、6月に入ると感染拡大が収まり、夏休みに向けたGo Toトラベルや外食を促進するGo To イートといった施策が発表され、世の中が元気を取り戻しつつあるようでした。7月になると芸術祭開催に向けて出展作家とのやり取りや、サポーターの募集も始まりました。当初、計画していた実施内容に、新型コロナウイルスの感染症対策を考慮して、屋外展示の会場数を増やしたり、イベントのオンライン配信を検討したり。そんななか、パフォーマンスプログラムでは実施できなくなったプログラムもありました(28ページ参照)。来場者との接触が主な業務となる会場ボランティアは、応募者がいるのかという心配もありました。これまで、地元の高齢者が大きな力を発揮してくれていた取り組みでしたが、高齢者は特に重症化が心配されるため、コロナへの警戒感は大きいと考えられました。また、会期中に県をまたいでの移動が制限された場合どうするか。来館者が少ない状況となった場合、充実した活動ができるのかなど、心配は尽きませんでした。



5月、開催に向けてのミーティングが繰り返された



事前説明会は密を避ける広い会場で行われた



非接触で作品鑑賞ができるリープモーションという技術はコロナの時代の鑑賞にもマッチした



ボーダレス・エリア近江八幡芸術祭「ちかくのまち」を振り返る映像



パフォーマンスプログラムを振り返る映像

NO-MA記者クラブでは編集会議の回数を減らし、イベントの取材を1記者に制限して、当初、予定していた10名で実施することになりました。

8月21日にサポーターの募集を締め切ったのですが、それぞれのサポーターにたくさんの応募をいただきました。参加者が集まるか心配された会場ボランティアも、51名の応募がありました(実際の参加は49名)。体調管理はもちろん、マスクの着用、手洗い・消毒の徹底といった感染対策を守っていただくをお願いをして、開催に向けて準備が進められました。

#### コロナ禍で生まれたもの

芸術祭が開催された9月から11月は、比較的、新型コロナウイルスの感染拡大が抑えられていた時期でした。目の見えにくい人が手をかざすことで作品画像を自在に拡大・縮小できる装置(リープモーション)を設置したことは、非接触が求められるコロナ禍の状況にも合致しました。パフォーマンスプログラムは、西之湖園地という自然に包まれた会場で開催され、近江八幡アカデミーはオンライン配信を行うことで、遠く離れた人にも届けることができました。

心配されたサポーター活動も、参加者の積極的な取り組みもあり、例年とそれほど変わらない活動を行うことができました。開催当初は、来場者に声を掛けることをためらっていた会場ボランティアの皆さんも、次第に適度な距離感をつかみ、来場者との交流も活発に行われました。NO-MA記者クラブでは54本の記事がアップされ、エデュケーション・サポーターが企画したイベント「ちかくのじかん」は、11月21日に開催されました。

会期終了後、芸術祭をまとめた映像、パフォーマンス映像がアップされ、広く配信されたことも、コロナ禍だからこそできた取り組みといえます。

今回の芸術祭では、来場者、スタッフ、サポーターに感染者を出すことなく会期を終えることができました。しかし、12月以降、感染者が爆発的に増えるという状況になり、より一層、コロナと共存した新しい生活のスタイルが求められています。試行錯誤しながら実施した今回の取り組みが、今後の芸術鑑賞における一つの指標となるはずです。

#### 開催までの流れ

##### 3月末

令和2年度地域と共働した博物館創造活動支援事業の審査結果が文化庁から通知され、“ボーダレス・エリア近江八幡”をみんなで作るプロジェクトが採択される。

##### 4月

7日 政府から7都府県に緊急事態宣言が発令される。  
16日 緊急事態宣言が全国に拡大。安倍首相(当時)の会見で、「最低7割、極力8割の接触削減」が求められる。  
23日 滋賀県からの協力要請を受けて、ボーダレス・アートミュージアムNO-MA、臨時休館(～5月11日)。

##### 5月

14日 滋賀県を含む39県で緊急事態宣言が解除。事務局、コロナ禍を想定した実施内容を検討する。

##### 6月

1日 滋賀県において、県をまたいでの移動が解禁される。  
18日 事務局、令和2年度第1回アール・ブリュット魅力発信事業実行委員会にて、コロナ禍での実施内容を検討する。  
30日 事務局、実行委員会での検討を基に、各種事業の実施内容を事務局において確定。

##### 7月

月上旬 事務局、芸術祭の準備が本格化する。  
中旬 事務局、サポーター3種(エデュケーション・サポーター、NO-MA記者クラブ 会場ボランティア)の募集をはじめ。  
下旬 夏休みを前に、Go Toトラベルキャンペーンが始まる。新型コロナウイルスの第2波と呼ばれる感染拡大が起こる。

##### 8月

中旬 第2波の感染拡大が収まる。  
21日 事務局、各種サポーター締切。

##### 9月

7日 事務局、会場設営開始。  
18日 事務局、第1回会場ボランティア事前説明会  
19日 事務局、芸術祭 開幕  
第2回会場ボランティア事前説明会、NO-MA記者クラブ第1回編集会議



“ボードレス・エリア近江八幡”をみんなで作るプロジェクトは、アール・ブリュット魅力発信事業実行委員会を主催として実施しました。実行委員会の構成団体は以下の通りです。

ボードレス・アートミュージアムNO-MA（社会福祉法人グロー[GLOW]）、滋賀県、滋賀県立近代美術館、近江八幡市、一般社団法人近江八幡観光物産協会、国立大学法人滋賀大学、NPO法人はれたりくもったり、滋賀県施設・学校合同企画展実行委員会

第1回実行委員会

2020年6月18日（木）10:30-12:00

場所：男女共同参画センター G-NETしが

出席：8名

事務局から、令和2年度事業の全体概要や事業計画を共有しました。特に、新型コロナウイルスの感染拡大防止対策を重点的に取り扱い、事業全体の運営について協議しました。



第2回実行委員会

2021年1月14日（木）10:30-12:00

場所：男女共同参画センター G-NETしが

出席：8名



事務局より、今年度実施した事業報告を行い、委員より意見や感想をいただきました。

委員の意見や感想

- ・「おもしろそうだから僕もやってみよう」という一人ひとりの主体的な行動から、ボランティアの充実した活動に繋がったと感じている。
- ・安土エリアの来場者数が旧市街エリアとほぼ同じだったことは少し意外に感じた。会場間が離れているというデメリットはあったが、それを上回るよさがあったと思う。ゆっくり散歩できたり、自然を感じたりするなど、場所としての魅力を感じてもらえたのではないかな。
- ・障害のある人が作品を鑑賞する際、スムーズに鑑賞できる体制を作ること、そして、安心して鑑賞できる体制にあることを積極的に発信することが重要と感じた。
- ・コロナ対策がしっかりされていたことにより、来場者が安心して芸術鑑賞や町歩きを楽しんでいたようだ。



# パブリシティ

2020年9月22日（火）  
ZTV（取材）

2020年9月24日（木）  
メディア内覧会実施  
日経新聞社、京都新聞社、毎日新聞社、産経新聞社

2020年9月28日（月）  
産経新聞  
五感をフルで楽しもう  
近江八幡で「知覚」アートイベント

2020年9月30日（水）  
京都新聞  
近江八幡で芸術祭  
町巡り作品と“出会い”

2020年10月6日（火）  
滋賀報知新聞  
ボーダレス・エリア近江八幡芸術祭  
作家10組の「ちかく（知覚）のまち」

2020年10月19日（月）  
京都新聞  
においと感触と音で感じる観光  
視覚使わず町歩きツアー

2020年10月26日（月）  
毎日新聞  
“ボーダレス”な芸術祭  
4会場で「知覚」と「知覚」テーマ

2020年11月1日（日）  
点字毎日（点字版）  
特集 町ぐるみで芸術鑑賞～滋賀・近江八幡～

2020年11月5日（木）  
点字毎日（活字版）  
特集・町ぐるみで芸術鑑賞～滋賀・近江八幡～

2020年11月6日（金）  
BS朝日  
宇賀なつみのそこ教えて！

2020年11月6日（金）  
びわこ放送  
東近江市特集・小西節雄のかかし作品

2020年11月26日（木）  
びわこ放送  
Good Sign

2020年12月10日（木）  
京都新聞  
ミュージアムのちから  
コロナ禍に考える  
ボーダレス・アートミュージアムNO - MA



2020年11月1日（日）付  
点字毎日（点字版）  
2020年11月5日（木）付  
点字毎日（活字版）

# 謝辞

本事業の実施にあたり、多くの方々にご協力をいただきました。心からお礼申し上げます。  
（敬称略、五十音順）

作者

- 久保寛子
- 小西節雄
- 坂本三次郎
- 椎原保
- 杉浦篤
- 鮎万里絵
- 武友義樹
- 谷澤紗和子
- ドゥイ・プトロ
- ナワ・トゥンガル
- 平野智之
- 福留麻里
- ヤマガミユキヒロ
- 米田文

協力

- 市川平
- 社会福祉法人岩手県社会福祉事業団 救護施設松山荘
- 大西暢夫
- 株式会社 奥田工務店
- Gallery PARC
- 社会福祉法人湖北会 湖北まこも
- NPO 法人しが盲ろう者友の会
- 滋賀県発達障害者支援センター
- 社会福祉法人しみんふくし滋賀
- 田端一恵
- 時里充
- 琵琶湖干拓小中之湖土地改良区
- モリヤコウジ
- 社会福祉法人みぬま福祉会 工房集
- NPO 法人 La Mano クラフト工房 La Mano

企画協力

- 北村哲夫（京都新聞社）
- 広瀬浩二郎（国立民族学博物館）

協力店舗

- 市
- Going Nuts!
- Kolmio
- 食堂ヤポネシア
- THREE CAFE
- 初雪食堂
- ふな幸
- ほりかふえ
- 万吾樓
- 明治橋 あまな



“ボーダレス・エリア近江八幡”をみんなで作るプロジェクト

助成：令和2年度文化庁 地域と共働した博物館創造活動支援事業

主催：アール・ブリュット魅力発信事業実行委員会

構成団体：ボーダレス・アートミュージアムNO-MA（社会福祉法人グロー〔GLOW〕）、滋賀県、滋賀県立近代美術館、近江八幡市、一般社団法人近江八幡観光物産協会、国立大学法人滋賀大学、NPO 法人はれたりくもったり、滋賀県施設・学校合同企画展実行委員会

後援：滋賀県教育委員会、近江八幡市教育委員会

実行委員

実行委員長：牛谷正人（社会福祉法人グロー（GLOW）理事長）

副実行委員長：笠原吉孝（NPO 法人はれたりくもったり理事長）

寺脇希（滋賀県文化スポーツ部文化芸術振興課主事）

木村司馬（滋賀県健康医療福祉部障害福祉課主事）

古沢ゆりあ（滋賀県立近代美術館学芸員）

濱本浩（近江八幡市総合政策部文化観光課課長）

田中宏樹（一般社団法人近江八幡観光物産協会事務局長）

藤田昌宏（国立大学法人滋賀大学教育学部教授）

外山聖（滋賀県施設・学校合同企画展実行委員会 副実行委員長）

エデュケーション・サポーター

石川淑子、梅次萌夏、岡本奈香子、奥田純子、桐山菊子、瀧陽乙子、竹間義昭、辻浦純子、橋本義郎、藤澤菜由

NO-MA記者クラブ

竹間義昭、田中純子、塚本悦子、辻浦純子、寺本ありさ、羽者家さおり、林初美、深田みどり、前田達慶、松井恵麻

会場ボランティア

赤田美恵子、有吉光子、飯田至、伊賀久美子、池田伊穂、石居佐代子、江角栄一、太田美穂、岡本奈香子、小原勇、加藤幸枝、川島幹雄、川田廣子、川村志奈子、川村嘉男、楠山俊英、久保美代子、小島加奈子、込山舞子、里仁、重田克則、竹間義昭、田中遼、谷川博紀、土山道夫、中嶋勝男、中嶋きよ子、中島清、中谷哲夫、中出康夫、西里修、羽者家さおり、林初美、原正雄、久木 茂、平川蒼悟、深田みどり、福島将夫、福永治夫、藤澤菜由、前岡幸次、前田達慶、三輪典子、山崎久雄、吉井昭雄、吉田英貴

“ボーダレス・エリア近江八幡”をみんなで作るプロジェクト ドキュメントブック

2021年3月30日発行

制作・発行 アール・ブリュット魅力発信事業実行委員会

発行責任者 牛谷正人（アール・ブリュット魅力発信事業実行委員会  
実行委員長、社会福祉法人グロー（GLOW）理事長）

デザイン 有佐祐樹

写真 有佐祐樹、NO-MA記者クラブおよび事業担当者

発行所 アール・ブリュット魅力発信事業実行委員会  
（事務局）社会福祉法人グロー（GLOW）法人本部企画事業部  
〒521-1311 滋賀県近江八幡市安土町下豊浦4837-2  
TEL. (0748)46-8100 FAX. (0748)46-8228

生きることが光になる。  
gLOW  
社会福祉法人グロー

NO-MA  
Borderless Art Museum NO-MA



